

ようこそ、ナースカ
フェヘ

ピラサワ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS学園の食堂の隅にある喫茶店。そこには少し変わったマスターがいる。

数少ない男性の彼は、偶に生徒達に奇妙なメッセージを届けるのだとか。

意味はわからないのに記憶に残る。何故かそうしようと思えてしまう、不思議な言葉。

少年（一人）少女（一部例外アリ）は今日もその扉を開く。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

平沢進氏の曲に感銘を受けてつい作ってしまいました。新参者による解釈の為、おぼ

つかない部分やあからさまに間違っている部分等があるかもしれませんがご容赦ください。

また短編の為、時系列が曖昧であることがあります。

因みにISには乗りません。

目次

織斑 一夏①

1

ラウラ・ボーデヴィツヒ①

15

セシリア・オルコツト①

30

凰 鈴音①

45

織斑 一夏 & シャルル・デュノア①

①

57

シャルロット・デュノア①

68

篠ノ之 箒①

84

織斑 千冬①

99

篠ノ之 東①

113

更識 楯無①

130

織斑 一夏②

149

クラリツサ・ハルフオーフ①

163

シャルロット・デュノア②

176

山田真耶①

190

ラウラ・ボーデヴィツヒ②

205

織斑 一夏①

ディナータイムが始まるか、というそんな時間帯。

グラスを磨いていると、カランカラン、と来客を告げる鈴の音が鳴った。

「ま、マスター！ごめんなさい、ちよつと匿つて下さい!!」

息を切らせてやってきたのは織斑 一夏くん。

IS——インフィニット・ストラトスというモノが作られ、尚且つそれは女性にしか動かせない。このことは世間どころか世界全ての風潮を一変させ、現在では女尊男卑がどんどんと強まっている、そんな世の中。

そんな中に現れた、唯一の男性操縦者が彼だ。

「おや、一夏くん。また楽しそうな事をしていますね」

「ちよ、何笑つてるんですか!」

「ふふふ、これは失礼。では、こちら側のカウンターにどうぞ」

「ありがとうございます! たぶん箒か鈴が来るのでなんとか………!」

急ぎながらコソコソ、と妙にレベルの高い芸当をこなしつつ彼は裏へと潜っていた。それを確認した後、再びグラスを磨き始める。

暫くもしない内に、また鈴の音。さっきの音よりも強く扉を押されたのか、その音はカラコロカラコロ、と大きく響いた。

「いらつしやいま」「一夏あー！」「」

……思わずグラスを落とす所だった。

「ねえマスター！一夏見なかった!?!」

「マスター！一夏がドコに行つたか知らないか!?!」

店の雰囲気をごち壊しながら叫んだ女の子の一人はISを開発した篠ノ之 束博士の妹さんであり一夏くん曰く「ファースト幼馴染」である篠ノ之 箒さん。そしてもう一人は、中国の代表候補生である風 鈴音さん。一夏くん曰く、「セカンド幼馴染」らしい。

「鈴音さん、箒さん。あまり大きな声を出されるとグラスを落としてしまうかもしれないのでそろそろやめて頂けませんか?」

「まだ開店してないんだしいいじゃないの」

「ワタシがグラスを落としかけたのですがねえ。これ、高いんですよ?」

「割れてないからセーフでしょ。それよりも!」

「このままいくら注意をしようとしても今の精神状態では聞いてもらえないだろうなあ。なら、大人しくご退場願うでしょう。」

「ここに来なかつたら見てないですねえ」

「来たのか!？」

「少なくとも先程も言ったように準備中なので、ある程度の良識がある彼は来ないと思いますよ」

嫌味を込めて言ってみた。非があちらにあるのでこちらは何を言われても痛くない。

「つく……! それについてはすみません、ですが!」

素直に謝ってくれる箒さん。だけどその後は少し余計かなあ。

「……ねえ、それってまるであたし達には良識が無いって言ってるようなもんじゃないの?」

一方、鈴音さんは最後の煽りに反応してしまった様子。沸点が低いところはまだまだ未熟ですね、と思わず呟いてしまったけど聞こえてはいなかったようだ。ふう。

「来るなりいきなり叫ぶお客様に良識があるのでしようか?」

まあ、態度は変えないんですがね。少なくとも、今の二人の態度はいただけのないなあと思うし。他の場所でやられたらもっと困ってしまうから。

「……うう、悪かったわよ! とにかくいないのね! 別の場所を探すことにするわ」

ブスつとした顔で謝られても、と言おうとしたが、彼がいないと分かるとさっさと出ていってしまった。

「……………元気なのは良いことなのですがねえ」

「すみませんでした……………」

「おや」

この呟きは箒さんの耳に届いてしまったようだ。貴女が謝ることではないのだからいいですよ、と言うと余計に頭を下げさせてしまった。コミュニケーションとは何と難儀なことか。

私も失礼します、そう言つて箒さんは再び駆けていった。本当の事を伝えなかつた彼女らにほんの少しの罪悪感を覚えたが、

「……………来ないと思う、と言つただけで来ていないとは言つていませんし」

少なくともワタシはウソをついてはいない。もし問い詰められてもそれで逃れられるだろう。……………それにしても。

「……………いやはや、中々治らないですなえ」

本当に、一夏くんは大変だ。

そして、ワタシも。

……………彼は変わったのだけどねえ、どうして周りはこんなに彼に優しくしないのか。思わ

ずため息が漏れた。ともかくこれ以上来ないように一旦鍵を掛けて、と。

「一夏くん、もう大丈夫ですよ」



俺がISを動かしてしまったせいで入ることになったIS学園。その食堂スペースの隅の隅、少し気を配らないと気が付かないところには扉があつて、その中では数少ない男の人がマスターをしている喫茶店がある。因みに夜にはバーになるらしい。千冬姉とかが通つてそうだなあ……。

そのマスターの左胸には『平沢』と書いたプレートがあるんだけど、義務だからつけているだけであり、その名前では呼んでほしくないと言われた。だからここに来る人はみんなマスター、つて呼んでるらしい。

……そして、俺がよく匿ってもらうスペースでもある。いつも迷惑かけてすみません、と何回謝つたことやら。

「今日もお世話になっちゃって、ホントすいません」

「いえいえ、君の大変さが分からない訳ではないですからね。毎日毎日大変でしょう？」
うう、優しさが目にしみるぜ。箒達もこれくらい優しかったらなあ………イメージが出来ない、どうしようか。

思えばマスターと初めてこうして話したのは何時だっただろうか？

……ああ、そうだ。あれは確か、クラスの代表を決める模擬戦の後に偶々この店の扉を見つけたのがキツカケだったんだ——

「いらつしやいませ」

カランカランと扉の裏から鈴の音。如何にも喫茶店っぽい、そんな感じだった。

「…………へ？」

そして、俺の第一声がこれ。…………いや、これは仕方ないだろ。まさかこんなところで男の人が働いてるなんて思ってたんだから。

マスターも声質を聞いて少し驚いていたようで、

「…………いやいや、まさかここをもう見つけてしまうとは。中々観察眼があるようです
すねえ」

「い、いやあ…………偶々ですよ」

「そうですか。ですが、今こうしてこちらに入られたのです。何かお飲みになりますか？ ああ、勿論お酒はダメですよ」

マスターの第一印象は、若いなあ、というものだった。なんか漫画とかでも、マスターってのは髭を生やしたおじさん、みたいなイメージがあったから余計にそれが新鮮に感じた。それにしても、なんか俺達とかと同年代なんじゃないかってくらい若い。…………実際に聞いてみると、千冬姉の一つ下だったんだだけだな。

「飲みませんよ！ うーん…………コーヒーとか紅茶つてありますか？」

「はい。今からですと紅茶のほうが早く出来上がりますが、どうしますか？」

「んー、じゃあそれで！」

「畏まりました。少々お待ち下さい」

「えっ？」

そう言ったとき、黙り込んでお茶を淹れ始めてしまった。

「あの、俺何も注文してないんですけど……」

「ああ、大丈夫ですよ。サービスです」

「どうぞ」

そう言って出されたのは強い赤みが見えるお茶。何か底に沈んでいるのが見えるけど、とにかく。ありがとうございます、と断って早速飲んでみた。

「……………甘い。けど、さっぱりとしてる」

「はい。……これは、『DEEMER』というブランドのオレンジジンジャーという紅茶です。フルーツティーの一種ですね」

底にあるものを口に入れてみると、ほんのりとした甘み、そしてとても濃厚な香りを感じた。こんなもの、あったっけ？ と記憶を掘り起こしていると、もしかして？ というものがあった。

「これは……ドライフルーツ、ですか？」

「ご名答です。ドライフルーツ特有の香りの深さが分かるとは中々将来有望ですねえ」

確かに噛むたびに、ふわっと口に香りが広がる感覚が分かった。レーズンとか柑橘系のものとか、色んな風味が口の中を支配する。だけどその中で、甘くない風味が立ってたんだ。そしてそれは直ぐに分かった。

「甘さが広がってるのに、生姜の風味が目立ってる……？」

「ふふふ。どうですか？」

甘くて、酸味もあって。紅茶の熱とその甘さが引き逢うかのように噛み合ってた。思わず大きく息を吐いてしまうくらい、今までのモヤモヤとかが吹っ飛んだ感覚があった。

「なんか、落ち着きます。今まで重い荷物を背負ってたのに、急に軽くなったみたいなた。少しお疲れのようでしたので、リラックス効果がありそうなものを選びさせて頂きました」

「す、すげえ！」

そんな事まで分かるなんて、まるでマスターみたいじゃないか!?

「マスターなんですよ」

いや、なんていうかベテランっぽいってどうか。

「ご馳走様でした、美味しかったです！」

「いえいえ。美味しそうに飲んでいただけるとこちらも淹れた甲斐がありました。……
ああ、お帰りになる前に」

「ん？」

マスターが急に裏に回って行ってしまった。まだお金も払っていないのに帰るわけにも行かず、待っている、直ぐに戻ってきた。そして、

「この花をお部屋にでもお飾りください」

そう言つて、一輪のキレイな花を渡された。

「えっと、これって蓮ですか？でも、なんでいきなり」

理由が分からないから聞いた単純な質問だった。

だけど……そう聞いた瞬間、一気にマスターの雰囲気が変わつたんだ。ニコニコとした柔らかい雰囲気じゃなくて、凄く厳かな、千冬姉みたいな感じ。

「一夏くん」

「……………はい？」

口調も変わっていて、ワケが分からないままとにかく返事をする事しかその時は出来なかった。そして。

「君はまだ何も知らない」

「なっ……………！」

いきなり初対面の人にそんな事を言われて、思わず大きな声を出しそうになつてしまったその時。

「———だけどそれは、決して悪いことではない」

「……………え？」

「その蓮は単に咲いているのではない、キミに咲いているのだから。」

蓮の花言葉は『清らかな心』『神聖』。キミが何も知らないという事は、まだ何者にも穢されていない、ということでもある。

これから先、キミは泥に塗れる事があるだろう。汚れる事があるだろう。

だが、蓮は泥の中でも決して汚れを見せずに輝き続ける。清く、そして美しく。

なればこそ、キミは蓮を咲かせ続けなければならない。それが枯れた時、きつとキミは泥に吞まれてしまうだろう。

悪意に吞まれてはならない。

自分の心のままに、清くあれ。

正しい心を持ち続ける限り、その蓮は咲き続けるだろう。

巡り廻る命。その中での特異点。

蓮は再生の象徴。貴方に渡した華が咲き誇った時にきつと貴方は少し、生まれ変わる
ことが出来る。

生の中の輪廻、再生。

人には夜が来て、夢を見て、そして朝を迎える。変わらない流れ、輪は巡る。

キミに夜が来るまで、Lotusが咲き続けることをワタシは祈ろう。

さあ、謳いなさい。その花はきつと、道を示してくれる」

意味は、分からなかった。そして、何故急に雰囲気が変わったのかも分からない。口調が変わった理由すら——分からない。

だけど、その言葉一つ一つは俺の心、俺の全てに染み渡るかのように身体に響いた。まるでその一句一句を刻みつけるかのように、脳に吸い込まれていく。

蓮が咲き続ける。

それは花という存在である限り、決してあり得ないことだ。だって、花は咲いて枯れ、種を残してまた蕾が出てくるんだから。それでも、何故か。

この蓮が枯れないようにしようと、思ってしまった。

もらった蓮を無意識のまま胸ポケットに挿し込み、そして気づく。

「——はっ!? ……マスター、今のは!?!」

「ふふ。ワタシからのアドバイスです」

「アドバイス……」

「はい。お茶共々、気に入って頂けましたか?」

「——はいっ!」

そう答えると、マスターは優しく笑ってくれた。

「——なんてことが」

「ありましたねえ」

カウンターでマスターと料理の仕込み。匿ってもらったお礼をしたい、と言うと、「では少し手伝って頂けますか？」と聞かれ、野菜を切ったりする手伝いをしている。

数ヶ月前の出来事に花を咲かせていると、マスターが「それはそうと」という言葉とともに

「その蓮はまだ、咲いていますか？」

答える。

「一度枯れかけましたけど」

だけど、

「また、咲き直しました！」

……あの時くれた蓮の意味。今ならその全てが分かる。だからこそ、この答えなんだ。

「それは、良かったです」

そう言って微笑んでくれたマスターが、まるで弟の成長を喜んでいる兄のように見えた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ①

今の私の姿をもし、昔の私が見ていたらどんな反応をするだろうか？

恐らく初めに浮かぶ感情は怒りだろう。「何故教官の邪魔をした男と仲良くしているのだ!!」とでも叫ぶに違いない。容易に思い浮かべる事ができる辺り、当時の私は相当頑なな性格だったのだろう。

弱くなった。甘くなった。

きつと昔の私はそう言うだろう。「お前はそんなにナヨナヨとした人間ではなかった筈だ」「何のためにそこにいるのだ」と、今の私と出会ったときには散々罵られること間違い無しだ。

あと、これも間違いなく聞かれるだろうな。

「お前が『師匠』と呼んでいるあの男は——一体何なのだ？」と。



IS学園の食堂。私はいつも空いていそうな席を見つけてそこに物を置いてある。そのテーブルに私の物が置いてあると分かれば、私の事を知らない人間でない限りはそこに近づくことはないからだ。そもそも女子というのはかくも噂が好きな人種だ。私の事は恐らく1年生の大体には伝わっているだろう。ふん、どいつもこいつもフアツションとしてしかISを知ろうとしない馬鹿ばかりだ。とつとと教官を説得し帰ってきていただかなくては……。そんな事を考えながら席を探していると、隅の方、それも殆ど目立たない位置に、壁と似た色をした扉があるのに気づいた。気になって近づいてみれば『OPEN』の文字。

……ここなら余り人もいないだろう。目立たないしな。誰にも邪魔を入れられることのない空間であることを密かに期待しつつ扉を開くと、軽やかな鈴の音が聞こえた。中は静かだ。あんなに五月蠅かった食堂の甲高い声が何処かに行ってしまったかのように感じた。客は誰もおらず、カウンターには店主らしき男が一人だけ……男、だど!?

だが少し考えて納得する。女尊男卑になったとはいえ、職業にはそれに見合った性別というのが存在する場合がある。こうした喫茶店の店長であればそれは男のほうが相応しい事が多い、ただそれだけの話だろう。

「いらっしやいませ。カウンターで宜しいですか？」

「ああ。お前はここの店主なのか？」

「はい。ここでマスターをさせて頂いています」

柔らかい口調だ。媚びているわけでもなく、飾っているわけでもない。クラリツサから喫茶店というものは『髭を生やした強面の男性がコーヒーを淹れている所なのです』と聞いていたのだが……あれは間違いだったのだろうか？

「ランチメニューはこちらになります」

手渡されたメニューを見ると、そこにはクラリツサに教えてもらったような物が並んでいた。やはり私の部下は間違つてなどいかなかったのだな！ この男が特殊なだけだろう。そうに違いない。

「このホットサンドのセットを頼む」

「畏まりました。お飲み物はコーヒーと紅茶、どちらになさいますか？」

少し考えてから、紅茶を頼む、と伝えた。

5分くらい経った頃に料理は来た。

「お待たせ致しました。こちらがホットサンド、そしてセットのサラダと紅茶です。砂糖は如何なさいますか？」

「要らん」

「畏まりました」

ホットサンドを齧る。サクツとした食感がしたかと思えば、すぐに中のチーズのトロ口とした感触があった。まあ、十分だな。

サラダに関しては何言なしの一言だった。金を掛けているだけあって、食材は全てキチンと一流のものが使われている。ホットサンドも十分に食える代物だった。まあ、喫茶店のマスターを名乗っているのだからコレくらいは当然なのだろうがな。それにしても、セツトの紅茶が妙に美味しい。いや、美味すぎるくらいだ。一体これは……？

「これはダーズリンか……？ いや、それにしても何処かスッキリとしすぎているような」

「はい。こちらはロンネフェルトの『クイーンズ・ティー』という銘柄です。お客様の仰る通りダーズリンと、そしてセイロンティーがブレンドされております」

『『ロンネフェルト』……?!? それは我が母国のものではないか!』

思わず声を上げてしまった。

ロンネフェルト。実際にこれまで飲んだことは無かったが、その名前をドイツで知らない者は殆どいないだろう。何しろ高級ブランドで、飲める場所は高いレストランや一流のホテルが殆どなのだ。私はそのような所に行く習慣は無かったし、あったとしても

それを頼んだ事は無かった。

「ああ、お客様——ラウラさんはドイツのご出身でしたね。お飲みになった事はお有りですか？」

「我が隊にあのような高級な紅茶がある訳がないだろう。ただ、ドイツの人間として私が母国が持っている誇りを……待て。どうして貴様が私の出身を知っている？」

回答はある意味当然で、しかしながら驚くべきものだった。

「ワタシはこの学年の全員の顔と名前、出身地を覚えておりますので。転校生の方であつてもそれは変わりません。マスターという職業は何かと記憶力が大切なのでねえ」
「……ふむ、なる程な」

この男はマスター、という職業にキチンと誇りを持ち、そして努力をしているらしい。それは素直に評価すべき点だろう。私が軍人として誇りを持つているように、この男には男なりの誇りがあるのだ。この学園全体の顔も名前も覚えるのにはかなりの労力がかかるに違いなかっただろう。ISをまるでステイタスか何かと勘違いしている連中よりも余程好感が持てた。

「それにしても、こんな高級なモノを何故店で出せるくらい仕入れられるのだ？」

「ふふ、紅茶を集めるのはワタシの趣味でしてね、先生方には秘密のルートでコッソリと……良いモノを仕入れさせて頂いているのですよ。ああ、これは秘密にしておいて下さ

い。バレると大目玉ですからねえ」

「……いいだろう。中々飲めないモノを飲ませてもらったのだ、口止め料として受け取っておく。因みに教師にはバレないルートだと聞いたが、それは教官にもバレていないのか？」

その問いにマスターは少し考える素振りを見せ、少し悔しそうに笑った。

「教官……ああ、織斑先生ですか。先生にはすぐにバレてしまいましたよ。いやはや、誤魔化すのには自信があつたのですがやはりあの人は鋭すぎる」

そうかそうか、やはりあの方は凄い！ 何しろ見た目と話し方からして掴めなさそうなこの男の企みを見抜いたのだ、ドイツで教鞭を取っていた時と変わりのない鋭さなのだろう。

「当然だ、教官は最強なのだからな！」

声が大きすぎたか？ マスターは少し驚いた顔をしていたが、また直ぐに笑みを浮かべ直した。

「……ふふふ、そうですね。ああ、お皿を片付けさせて頂きます。紅茶のほうは如何でしたか？」

落ち着いた雰囲気の中でマスターと談笑しているコレは、まるで喫茶店なるものではなくバーのようなのではないか、とどうでも良いことを考える。

憎き男の事もその取り巻きの女共の事も、今は思い浮かばなかった。

「私は紅茶には詳しくないのだが……良かった。ここに入る前は少し気分が悪かったのだが、今はこんなにも落ち着いている」

「そう仰つていただけると幸いです」

そう言つてまたマスターは笑つた。

「さて」

「……………?!」

そして襲い来る強烈な悪寒。

「いきなりで悪いのですが」

ワケも分からないままマスターを見た。……笑顔だ。だが、ただの笑顔ではないように思えた。

ニコニコとした笑みは変わっていない。だが、何故か——私はその笑顔を見て——

——これから先忘れようがないような恐怖を感じた。

そして、それは間違いなどではなかつたのだ。

「いいですか？ワタシが今から言う言葉を、しっかりと聞いておいて下さいね？」

雰囲気が一気に変わった。

「っ!? ぐうっ……!?」

大きな鉛を担いでいるかのような重さでのしかかる重圧。目を合わせただけで更に増えるソレに、膝を地面に突きかけるのを必死で堪えた。

このようなプレッシャーを出せる人間を、私は一人しか知らない。……ああ、そうさ。教官だ！

「後で先輩にドヤされるのはワタシなので。怖いですねえ」

何故だ!? 何故こんなに弱そうな男が……こんなに強いプレッシャーを与えることが出来る!?

分からない。

分からない。

何故? 何故? 何故? 何故? 外見にとらわれてはならないのは分かっている。

だがしかし……余りにも、違いすぎるではないか!!

そんなこちらの焦燥などまるで興味がないかのように男は語り始めた。さっきの笑みは、いつの間にか消えていた。

「ああ、貴女は子供だ。母親に甘えることが出来なかった、哀れな子供だ」
子供。哀れ。

ドイツの研究者の連中にこれまで何度も言われたことを、初対面の赤の他人から言われたことで頭に血が上る感覚が分かった。

「つ、何を……急に何を言っている!!」

必死に虚勢を張っては見たが、動けない。こんなにも屈辱な言葉を味わったのに、さらに屈辱を重ねられた気分だ……!!

そんな私の胸中など見向きもしないかのように、男は語りだす。

「なればこそ、貴女は世界を知るがいい。赤い夕日のその先には、気紛れな貴女がいるであらう。チキユウを知る貴女が外を知らぬ子供の貴女を見ている。

ああ、子供は素晴らしい。好奇心と純粋で溢れている。身体がエネルギーで満ちている。だが、それは一度失わなければならないのかもしれない。

全ては一つであり、一つは全てなのだ。一つすら得られない子供は全てになれず、全てになれないのだから一つにはなれない。

一つを知り、全てを知る。

全てとは世界であり、自己を取り巻く環境。

貴女はきつと気づくだろう。貴女の世界には、貴女を守ってくれるモノが沢山、沢山有るということを。

世界ではゾウが水を浴びている。

朝日を浴びて鳥が鳴いている。

獲物を追いかけて虎が走っている。

犬が撫でられて幸せそうに眠っている。

ゾウも、トリも、トラも、そしてイヌもヒトも。全ては繋がりを持つて生きているのだ。知識を分け合っているのだ。

そしてそんな中、ヒトも生きている！

奇跡の連続で、動物たちと繋がりを持ちながらワタシたちヒトも生きているのだ！

少女よ、後は気づくのみだ。子供の貴女が世界の貴女になるように。

世界が貴女を作り、貴女が世界を作る。世界が貴女であり、貴女が世界なのだ！

だが忘れるな、貴女が世界を見つけた時。それはチキユウを知る貴女がいなくなる時だ。

自らの世界に気づいた時、誰かの泣き声が聞こえるだろう。それは合図だ。受け入れなさい、その哀しみを。泣きなさい、声を震わせて。

守ってくれる者がいる。抱きしめてくれる者がいる。一緒に泣いてくれる者もいる。

全てに愛されない子などいない。愛されて、ヒトは人に、そして大人になっていくのだから！

愛を知ることがいい。愛される事を知り、愛する事を知る。守られている事を知る。全てを知ろうと思えた時、貴女は何かに気づく。その思いを胸に、未来へと生きるのだ。探しに行くが良い、チキユウを知る貴女自身を！」

……そう言い終えた瞬間、教官が放つようなプレッシャーは霧のように薄くなって、消えた。

「……………」

今なら、身体が動く。

殴ってやろうと思った。屈辱的な事を言ったのだ、それくらいは許されるだろう。

「……………!?!」

だが、出来ない。私の身体は「アイツを殴れ!」という私の命令に反して、NOを叫び続けている。

「ふふふ。喋りすぎてしまいましたね、申し訳ありません」

苦笑いを浮かべながら頭を下げられた。

違う! 今してほしいのはそういう事ではないのだ!

「ですが、貴女の気持ちも分かります。一夏くんには一夏くんの理由があるように、貴女には貴女の理由がある。どちらかが間違っている、というわけではないのです」

いいから、私の身体を開放しろ!!

「そういう時にぶつかり合えるのは、若者の特権です。タツグマツチ、頑張ってください」

ええい、勝手に話を進めるな!!



……などと言うこともありませんねえ、と思い返す。そんな今は、ラウラさんと共に洗濯物を干し終わったところだった。本日も晴天だ。

「師匠！今日はセシリアが久しぶりにマトモな弁当を作ってきたのだ！これも師匠の教えのお陰だな！」

「ワタシを何時まで師匠と呼ぶのですかねえ」

あの話を終えた日の数日後。タッグマツチが終わり、色々と重大な出来事が有ってから、ラウラさんはワタシを「師匠」と呼ぶようになった。もう少し年を取ってからならともかく、まだまだ三十路に届かないワタシが「師匠」と呼ばれるのはどうにもむずかしいものがある。

「私を救い出してくれたのは確かに嫁だ、一夏だ。だがしかし、私に生きる道を指し示してくれたのは貴方ではないか！ならば、私にとつて貴方は永遠に師匠なワケだな！」

「いや、そのりくつはおかしい。……まあ、悪い気分ではありませんがね」

苦笑いを浮かべると、そうだろうそうだろう、とドヤ顔で頷かれた。可愛らしい。恐らく一夏くんの周りで一番純粹で良い子なのではないだろうか？素直なのは良いことだ。

そんな彼女はワタシの隣に座って空を見上げて笑っている。

「私には仲間がいる、部下がいる、教官がいる、嫁がいる！ クラリツサ達には守られて生きてきた事が分かっている今、今度は私が皆を守り導くのだ。師匠が言っていた、全ての動物達のように！」

「……やはり刺激が強すぎましたかねえ。ですが、貴女は確実に良い方向へと進んでいる。頑ななだけだったラウラさんはもういなくなってしまうました」

変わることが必ず良いことか、悪いことかなんてワタシには分からないが、少なくともあの時の何も知らない少女は消えてしまった、ということだけは確かだ。

今あるのは……。

「むっ!? すまない師匠、そろそろ嫁達と訓練の時間なのだ。これで失礼する」

「はい、頑張ってきて下さいね」

「ああ！」

一夏くん達と笑い合える、守り合える。世界を持ち、純粹さを忘れない、そんな可愛い女の子だ。

セシリア・オルコット①

「……………」

「……………」

「……………イケる」

「え……………?」

「ああ……………普通に食える、な」

「うむ、特に問題ない」

「これなら……………うん、大丈夫ね」

「食べられる！ 味わえるよ！」

「や……………やりましたわっ！ わたくし、ついに、ついに成し遂げました！」

「ああ、本当によくやったよ……………！」

「一夏さん……………」

「一夏の言う通りだ、よく頑張ったな……………！」

「箒さん……!!」

「そうね、その努力に関しては素直に尊敬するわ」

「鈴さん……!!」

「頑張ったね、本当によく頑張ったねっ……!!」

「シャルロットさん……!!」

「よくぞ成し遂げた! 流石だな!」

「ラウラさん……!! 皆さん……!!」

「「「ありがとう、マスター!!!!!!」」」」

「えっ、そっちですのっ!?!」



その話を聞いたのは、一夏さんと訓練をしていた時でした。

あんまり客が入られても忙しすぎるらしいから内緒な、と前置きをされてから一夏さんに教えていただいた情報は、なんでも食堂のそれも隅の方に目立たない扉があり、そこを開けると喫茶店があるとの事でした。

「紅茶が凄く美味かったからセシリアも気に入るんじゃないかと思ったんだ」

無邪気に笑う一夏さん……ああ、素敵ですわ。

「まあ、私の為に……ありがとうございます一夏さん！」

「ああー！」

あらあら、箒さん。そんなに睨まないで下さいませ。これは普段からのわたくしの行いによる当然の報酬なのですわ。ああ、今からもう楽しみで仕方ありませんわ！

お昼休み。

早めの昼食を済ませてから少し周りを歩いたのち数分のこと。

「えっと………」

見つけたのは白い壁が続く食堂の隅にポツリと見えるクリーム色の扉。注視しなければ判別不可能なそれを見つけるのには少し時間がかかりました。

それにしても、

「本当に判りにくいですわね……」

客商売なのですからもつと扉を目立たせたほうが良いのですが、兎に角入ってみましょう。

扉を引けば鈴の音、そして奥には……マスターと思わしき男性が柵のピンを整えておりました。

「いらつしやいませ」

彼はこちらに気づくとにこやかな顔を保ったままこちらに一礼、カウンターへと案内をしてくれました。この対応だけで既にサービスの良さが伺えますわね。

「一夏さんから聞いてはおりましたが、本当に男性なのですね」

「ええ。皆様初めてご来店された方は驚かれますねえ。特に一夏くんが入学される前は男性のスタツフは用務員の方とワタシ一人でしたから」

成る程、と領きながら話題はもう一つの方へ移行します。

「何故あのような判りにくい扉にしているのですか？ 入るお客も入らないと思うのですけれど」

「この店とワタシが男性であることがバレると、恐らく大勢の生徒の皆様が来られるでしょう？ 繁盛するのは確かに嬉しいのですが、その分お待たせする方々も増えてしまうのでねえ。昼休憩を有効に活用して欲しいこちらとしては、ここが溢れるよりも食堂が繁盛するほうがありがたいですよ」

「まあ、確かに予想は出来ますわね……一夏さんもそうでしたもの」

今ならクラスメイトの方々の気持ちも分かりますわね……ああ、今思い出しても恥ずかしい！ ああの時の私はどうかしてしまいましたわ！

「そうでしょう。その分、来られた数少ないお客様には出来る限りのおもてなしをさせて頂いております。ご注文はどうなさいますか？」

「お昼は食べて来たので紅茶をお願いしますわ。茶葉は……」

「畏まりました」

注文に一礼すると早速茶葉を用意し始めたマスターを慌てて呼び止めます。

「ちよつと、私はまだ紅茶としか言っておりませんわよ!？」

あまりに早計に過ぎないでしょうか？ と詰め寄ると、マスターから聞こえたのは「ああ、説明不足で申し訳ありません」というものでした。そのまま言葉は続きます。

「この喫茶店では初めて紅茶を頼まれた方にはこちらの勝手に銘柄を決めさせていただいているのですよ。ああ勿論、お味は保証します。もしもご満足いただけられないような

ら、お代は頂きません」

最後の方は強い口調でした。

「はあ……」

まあ、そこまで自信があるのですしたら、と言って送り出しました。紅茶の本場から来たのは分かっていらつしやる筈なのに、本当に自信があるのかそれとも蛮勇なのか……そんな事を考えながら紅茶を待つこと10分程。

「お待たせしました。アールグレイでございます」

「ありがとうございます」

カップとティーポットがカウンターのの上に出され、手慣れた手つきで注がれる紅茶の色を眺めます。淹れ方もカップの温度も完璧でした。

「砂糖は宜しいですか」

「ええ、結構ですわ」

カップを顔に近づけて、香りを確かめます。……ああ、これは自信を持たれて当然ですわ。通常の安いアールグレイの茶葉はどうにも香りが強いことが多いのですが、これはツンと来ることがない、柔らかな香りがします。この時点でもうしつかりとした茶葉であることは間違いありません。

認めます、これは十分お代を取れる茶葉ですわ。

「では、頂きます」

「どうぞ」

英国淑女たるもの決して音を立てず、静かに口に含みます。

何処かで飲んだことのある味。何か柑橘系のようなスツキリとした香りが口中に広がって、フワリと溶ける風味。間違いなく、いえ、ですがこのような離島に……でも私がこの紅茶の味を間違えることは無いはず。これは……

「……Jinng Tea、ですの？」

「流石、ご名答です」

一瞬目を見開いたかと思うと、直ぐに笑みを向けてくれました。その驚いた顔が見ることが出来たからか、思わず気分は良くなってしまいました。

「私もオルコット家の人間ですもの。これくらいは判りますわ！ ……いえ、そうではなく、よくこのような高価な物がありますわね」

「紅茶は各国のブランドを出来るだけ取り揃えています。色々な国から生徒さんが来られますからねえ。ここを見つけた方々には少しでも祖国の味を味わって頂きたいなと思っっているのですよ」

「まあ！ 律儀ですね」

「マスターの嗜みです」

笑うマスターはまさしく理想の英国紳士でした。もし一夏さんに先に会ってなければ……私はもしかしたら、この方に心を惹かれていたかもしれません。勿論今の私は一夏さん一筋なのですけれど！

それにしても、何かお礼をしたところですわね……そうですわ！ 私の作ったサンドイツをお裾分けしてあげましょう！ 本来は一夏さんに渡す予定でしたが、紅茶のお礼——チップ代わりにしましょう。

「あの、マスター」

「何でしょうか？」

「お礼と言つては何ですが、よければサンドイツチを食べて頂けますか？」

一つ取り出すと、それを両手で受け取つて早速口に入れてくださいました。

「これはこれは、ありがとうございます。若い方の手料理がいただけるとは、年を取るのもいいもので……す……ね……」

暫く咀嚼していたマスターが、急に両手を広げました。どうしたのでしょうか？

「ラー……ラー……ライヨラ　そーらにみごとなキノコのくーもー！」

そう言い残して……倒れました。

「ちよ、ちよつとーどうしましたの？」

「

息を……していないですって……!?

「ま、マスター？ マスター！ きゅ、救急車、じやなくて、先生、あ、電話を……」

「せ……セシリアさん、大丈夫ですよ」

「え？」

声が聞こえたので思わず振り向くと、息が止まった筈のマスターが笑顔で立っていました……顔が凄く引きつっています。

「セシリアさん」

「は……はい」

「その料理、人前で出してはいけませんよ。絶対です」

「そんな!? 一体どうしてですか？」

「美味しくないので」

……即答されたそのハッキリとした言葉に、少なくないシヨックを受けました。うつむいていると、頭上から唸り声、最後にため息が聞こえました。

セシリアさん、という声に顔を上げると、マスターが頭を下げておりました。

「失礼な物言いをしてしまい申し訳ありませんでした。お詫びと言つては何ですが……少し料理を見て差し上げましょう。被害者が増えてはいけませんからねえ」

「言葉の棘を鋭くするのはやめてくださいまし！」

それからというもの、マスターと私で料理の特訓は続きました。暫くはマスターの料理を見てイメージを覚え、その後はマスターが各種材料を用意して、私が作り、それをマスターが評価する……という形で行ったのですが……

「ラー……ラー……ラー…… ライヨラ あんなにみごとなひこうきぐーもー！」

「ラー……ラー……ラー…… ライヨラ ゆーめにみなれたほのおのあーめー！」

試食の度にマスターは歌って倒れてしまいます。……恥ずかしながら、私も倒れることがあるのですが。その度に問題点を指摘されるのですが、そこを直してもまた新しい問題点がどんどんと出てきてしまい、キリがありませんでした。

「セシリアさん」

「はい……」

そして、あの時。

3度めの復活をされた時に言われた言葉が、酷く胸に突き刺さりました。「諦めませんか？」

「……………」

突然残酷な目つきになったかと思うと、まるで私をあざ笑うかのようにマスターは語り始めました。

「そう、諦めに行こう！」

ヒトには得手不得手があるもの。しかし、その不得手をさも得手であるかのように見せるオマエの法螺は非常に滑稽であり、愚かである。だがしかしその法螺吹くオマエをワタシは評価する。何故ならオマエは機械ではないのだから。

今のオマエはそう、吹き矢だ！ 逃げながら放たれる毒に彼らは苦しみ悶えるだろう。オマエの放つ矢はヒトを彼ら彼女らを死に至らせる。

少女よ、ワタシは問う。

そのままでもいいのか？」

その問いに対して、どうすればいいのかを考えます。考えます。ですが、理屈で考えれば考えるほど、どんどん思考は袋小路へと迷いこんでしまいます。

そして気づきました。

もう理屈ではダメなのです。常に冷静で、なんて不可能。なら、後は感情をそのまま

ぶつけるしかないではありませんか。

「——わ」

「……」

「このままでいいわけなんて、ありませんわ！ わたくしだって判ります、ええ、きつと料理の才能なんて備わっていないのでしよう。ですが、それでも！」

精一杯の言葉を送りました。目を瞑りたい気持ちを堪え、こちらを見下す冷たい目に負けないように。

暫くの沈黙。マスターが突然フツと笑ったかと思うと、

「ならば石の橋を叩いて渡るが良い！」

ダイアグラムだって折り紙で折ることが出来る！

やれば出来るがやらねば出来ない！

前時代を捨てて未来に生きる、ああ、確かにそれも一つの生き方。だが生き方は無数にあるのだ！

そう、オマエは磁石を指すがいい。大切な者達を、大切な誇りをひつつけ続ける、そんな磁石。愚鈍過ぎる錆びた銅などをくつつける必要など無い。

ヒトとは本来愚かであり我儘な生き物。何を遠慮することがあるだろう。

機械を纏う少女達はそう、まるで戦うために生まれたサイボーグ。身体に機械がついているのだ、心までどうして機械にすることがあるだろうか？

さあ、今こそ本能の、感情の重さを知るがいい！

覚悟せよ、オマエの道は険しい道。山があり谷があり、崖があり、そして罠があるだろう。されどオマエは登らねばならない。心まで機械になる前に……」

「登る……」

「オマエが望むならワタシは杖と為ろう！ 支えなくして登れぬ山なら支えを使えばいいだけのだから！ さて」

言葉は曖昧ですけど、仰りたい事は判ります。日本語とはかくも難しいもの、中々覚えるのは大変です。ですけど、この言葉が意味するものは。

私が助けを求めれば、マスターはきつと支えてくれるであろうということ。

私は応えねばなりません。その言葉に。そして、

「ついでにこれられますか？」

恐ろしい雰囲気は無くなったものの、未だ私を見据えるマスターの鋭い目に。

「私、私は——！！」



ラウラさんからセシリアさんの話を聞いた時は顔には勿論出さないもの思わずガツポーズをしそうになった。もう若くもないし恥ずかしいので堪えたが。

「いやあ、セシリアさんは強敵でしたねえ……」

皿を洗いながら感慨に耽った。

マスターの嗜みとして毒物の訓練等も半ば強制的に受けさせられたが、まさかあの訓練を超える劇薬があるとは想定していなかった。これは明らかにワタシの落ち度であり、反省点である。

「まあ、矯正は出来たでしょう」

20年を超える時の中で初めて胃薬を使った。二度と使うことがないように祈る。

だが、ここではた、と気づく。果たしてメシマズだった彼女が、こんな事で素直にレシピを参考にしただらうか？先輩もそうだったが、ああいう輩は教科書通りを嫌う傾向にある。寧ろ、自分に合った料理を作ると意気込み、自分で新たなレシピを……。「——マスター!! わたくし、マスターに少しでも追いつく為に、オリジナルレシピを考えてきましたわ! 是非一度味見してくださいませ!」

アーーーーー オワツターーーー
……じゃあ、またこんど！
オワツターーーー

凰 鈴音①

何も考える気になれないまま、歩いてた。

事の発端は中学校の頃の約束だった。

『一夏……もし、あたしの料理が上手くなったら、毎日酢豚を食べてくれる？』

最後まで素直になれなかったあたしの、精一杯のアプローチ。

日本では「俺の為に毎日味噌汁を作って下さい」というプロポーズがあると聞いて、必死に考えだした言葉。

『ああ！』

頷いた時の真剣な、そしてカッコいいその顔をあたしは忘れていない。

だから、再開した時、あたしの事を覚えていてくれた事が嬉しかった。

「あの約束だろ？」

約束していた事も覚えていたのが嬉しかった。

だからこそ。

「料理が上手くなったら毎日酢豚を奢ってくれるんだよね！」

肝心な所に欠落があつたのがどうしても許せなくて、つい手を出してしまった。

これまでも——転校する前にも、嫉妬から思わず手が出てしまう事があつただけど、こんなのはあんまりじゃない。あたしはこんなに待つていたのに。

一夏は変わつてなかつた。良くも、悪くも。

あたしの告白、一体何だつたんだろいなあ。

座り込む気分にもなれずに歩き続けていると、いつの間にか食堂に来てた。

「やば、門限に遅れる前に戻らないと……はあ」

戻らないとは思いつつ、手を出してしまつたという後悔と、なんで肝心な所を忘れていたのだという怒り。二つの思いがごちゃ混ぜになつてよく分からなくなつてきた。

「考え込んだりダメダメ！ しつかりしないと……ん？」

頭を振つて気分を入れ替えようとした先に、仄かな明かり。

こんな所にこんなドアあつたかしら？ と思ひながら、小さな取っ手を引いた。

「いらつしやいませ。こんな夜分に学生のお客様とは珍しいですねえ」

そこにはゆつたりとした雰囲気のプロア、そして男の——バーテンダーの格好をした

——店員がいた。目を凝らしてネームプレートを見る。そこには

『Master SHINICHI HIRASAWA』の文字があった。

マスターと書いてあるつてことは、まあきつとそういう事なんでしょうね

と思ひながらカウンターに座った。そしてすぐに突つ伏した。

マスターはこちらの様子を一瞥すると、こちらに何が合ったのかも聞かず。ただ静かにメニューを差し出してくれた。その氣遣いが、少しだけ嬉しい。

「ご注文は如何なさいますか？」

「なんでもいい」

普段なら絶対することのない、やる気のない注文。だけどマスターは困った顔をする。こともなくただ微笑み続けるだけだった。

「では取り敢えずお茶を出させて頂きますが、宜しいですか？」

「それでいいわ」

「チョトマテネー」

「なんで片言なのよ」

「いえ、なんとなく」

……コイツ、結構変なやつね。弾よりはずつとマシだけど。

カウンターに暫く突つ伏していると、顔の近くでカタリという音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

「ん、ありがとう」

できたてのお茶、カップからは湯気が溶けていくのが見える。薄い緑色は昔一夏の家で飲ませてもらった緑茶を思い出す。喧嘩した筈なのに一夏が頭から離れないのは惚れてしまった弱みってヤツなのか。

取り敢えず心を落ち着ける為に一口。……？ あれ、これ緑茶っぽいけど緑茶じゃない？

あー、なんだっけこれ。確か……あつ！

「これ、凍頂烏龍？」

「ええ。良くお分かりになりましたねえ」

「香りが緑茶と全然違うもの。そりゃ分かるわよ。しかもこれ、多分高いやつでしょ」

「そこまで分かるものなのですか？」

「ふふん、案外あたしもマスター向いてるんじゃないかしら。……ねえ、それより、高い凍頂烏龍っていうことは」

身を少し乗り出してみると、「ええ」とマスターは笑った。

「お代わりはまだまだ用意出来ますよ」

「よっし、アンタかなり出来るじゃない」

「ふふふ、マスターですから」

.....。

そこからは、暫く愚痴を聞いてもらった。

「それでね、一夏たら」

「どんとどんと場の雰囲気が悪くなってしまうのが分かるけど、あたしは止まれなかった。感情に任せて、ただただ愚痴を言うばかり。」

そして。

「第一、あたしはあんなに頑張つて告白したのにアイツは全然気づいてくれなかった！」
「そう口に出した瞬間、ゾクリと背中にムカデのようなものが走つたような気がした。」

そしてかかる重圧。

「甘えるな風 鈴音」

重い頭をギリギリと動かしながら発信源の方を向いた。

それは、今までとは打つて変わった表情をしたマスター。そして、人のような顔をして、いる得体のしれないナニカから発せられていた。

気味の悪さに目を背けたくなくなった。だけど、簡単に逃げるのはあたしのプライドが許

してくれない。

「な、急に何よー！」

出来るのは精々、空元気で吠えるくらい。

「オマエの言うことは間違つてはいない。確かにオマエにとつてその約束は支えだったのだろう。織斑一夏が約束を間違えて覚えていたのは彼が悪い。

だが、この世には口に出して言わねば分からない事が数多くあるのだ。特にオマエの胸に秘めている想いなどは尚更だ。

恋心とはかくも素晴らしいものだし、何も言わずに伝わり合う心など如何にも文学にあるようなロマンティックなものだろうな。だが、そんなものは滅多にない出来事ではないのだ！」

「じゃあどうすればいいのよ！ どうすればよかつたのよ！ どんなに頑張つて伝えても、アイツには伝わらなかつたのに！」

夜なのに思わず叫んじやつた。だけど、それくらい……今のマスターの後ろであたしを睨んでいるナニカは気持ちが悪かつた。

だけど、マスターはあたしの叫びなど意に介せぬように鼻で笑つた。

「オマエがその約束をした時、オマエは必死だつただろう？ それは何故だ」

「それは、だつて……もしかしたら、このままずっと離れちゃうんじゃないかと思つ

ちゃって」

「なら今日再開して、約束が噛み合っていなかった時。もうダメだと思ったか？」

「え……？」

そういえばあたしはまだ怒ってしかない。いや、落ち込んでもいるけど。だけど、あの時みたいな『振られたらどうしよう』なんて恐怖は全然浮かばなかった。

「ワタシが言いたいのはそれだ、風 鈴音。

そもそも別れる時と今とで環境も状況も違うに決まっているではないかバカモノ。

ワタシの甘えるなどはそういうことだ。一度の失敗でオマエは諦めるような臆病者か？ましてや、相手は人気のある織斑一夏。

ああ、昔のオマエも今のオマエも本気なのは分かっている。だが余りにもオマエは肝心な所で臆病になってしまうクセがある。

毎日のように幸せな未来、幸せな夢を想像するがいい。その時のオマエは何と言っている？ 愛を紡いでいる時と同じリズムで素直に口を開けば良いのだ！

晴れた日の空を見て未来にある知らない地図を書け！ オマエの願う未来を空想——まさしく、空に想い続けるのだ！

大体、昔のオマエと違い、今のオマエにはまだまだ機会はあるではないか。

今日がダメなら明日、明日でダメならもう一つの日、その日がダメでももう一つの日

がある！」

「続くもう一つの、チャンス」

チャンス。あたしにもまだまだ、チャンスがある。

胸に刻みつけて気合を入れる。重いプレッシャーはいつの間にか消えていた。

マスターを見ると、さつきみたいな背後にあつたワケの分からないナニカも消えて、最初の時みたいな笑顔に戻っていた。

「いいですか？ 合言葉は『消去可能』です」

「消去、可能？」

「ええ。過去の事でやり直しが効くことなんて沢山あるのです。貴女の昔の約束を存在させ続けることもできれば消去する事も出来る。その後でまた約束を契れば良いだけなのです。昔の消してしまいたい溜れた声など、未来のいらぬ言葉で洗い流してしまえばいい」

「第一、拳で語るなど論外なのです。彼にとつては恐怖の対象にしかありませんよ？」

「あ、あれは一夏が鈍感なのが悪いのよ！」

もう少し女心を理解してくれたっていいじゃない！

だけど、マスターは「そうですね」とも「いや」とも言うこと無く、

「うーん……」

って暫く考え込んだ。その後、まだ考えながら言葉を捻り出しているのが分かるようなゆっくりとした口調で話した。

「鈍感なのは別の問題として、恋愛云々についてのあの対応はワタシ、仕方ないと思うんですよねえ。何しろ、色んな国、色んな人が彼を狙っています。それは恋愛的な意味でも、ハニートラップ的な意味でも。それに気づいて尚且つ悟られていないように振る舞う。どれ程それが心にストレスを与えていることか」

「う……………」

あたしはハニートラップなんか考えてない！ そう言いたかったけど、政府の方からはそういった指示が出ていたと聞いたことがある以上、あたしにキツパリと否定する事なんて出来ない。

そういえば、と、思考はたられればに入っていく。あたしが転校する前から一夏は色んな女子からの告白を断ってた。そういった話を聞く度に、その子には申し訳ないけどホツとしたしまだまだチャンスがあると思えた。

だけど、もしあの時から一夏が鈍感じやなかったら？

……想像しただけで怖くなった。あたしのあのアプローチにも気づいていたら。そして断りそうな素振りを見せていたら。申し訳無さそうな顔で話しかけられたら、辛く

て逃げ出してしまいそう。

そう考えたら、マスターの言う通り今の状態はあたしにとつても他の子にとつてもまだチャンスがあると言えるのかもしれない。

……よし！

「まだアイツの事を許したわけじゃないけど……でも、気持ちの整理は出来たわ。ありがとね」

待つてなさいよ一夏！ 何時かあたしに振り向かせてみせるんだから！

「それなら何よりです。先生に見つからないように気をつけてお帰り下さい」
「……………」

あたし、無事に帰れるかな。



一夏くんをn回くらい匿って逃した後、ふうとため息をついた。

「なんとかしてあげたいのですがねえ」

ワタシが聞いた所によると、一夏くんは小学校の頃から既にモテていたらしい。そして女尊男卑の風潮を抱えたまま中学校に上がり、ドイツでの例の事件、そしてこのIS学園への入学……彼にどれだけの重圧がかかっているのか、それを考えただけで哀れに思えてしまう。

色々な子からの好意に気づかない彼だが、その鈍感さはもしかすると後天的なものではないだろうか、と考える事がある。

元々、彼は凄く真面目、且つ自分にプレッシャーを掛けている子だ。

「俺がやらなきゃ」と、まるで全て自分がしないとイケないかのような言動をすることがある。「俺が皆を守る」「俺が千冬姉を守る」ああ、その心がけは素晴らしいものだ。だけど、ヒトの身体は一つしかない。器に合わない物を守り続けようとすればその器は何時か割れてしまう。その器が例え身体であっても、心であっても。

以前鈴音さんが言っていた記憶がある、「一夏くんが鈍感じゃなければ」というIF。誠実な彼はその一つ一つに真剣に応えるに違いない。でも、普段からのアピールにまで気を遣わなければいけないとすると、きつとストレスは相当なものになるだろう。そ

の上でここに放り込まれ、ハニートラップ等にもいちいち警戒しつつ毎日誰にも頼れない環境の中過ごしていく。

無理だ。精神が崩壊するか、若しくは自らの精神を守るために人を拒絶する未来しか見えない。

「一番簡単なのは彼女たちが素直になることなのですが……難しいでしょうねえ。ああ、このままではワタシまで敵に負けてしまう」

どうにもならなさそうなら先輩に相談したほうがいいかもしれない。

織斑一夏&シャルル・デュノア①

世界で二人目の男性操縦者がIS学園に入学してから、俺の周りは更に騒がしく……
もとい、賑やかになった。

更衣室の案内をしようと思えば阻まれ、何故か手を繋いでいる写真が学園全体にばら撒かれ、一部の界限ではなんか俺とシャルルの本まで出回っているらしい。いや、どんな本だよ。聞いてはみたが、

「織斑くんにはまだ早いよー」

の一点張りで全然教えてくれなかった。まあ、別に俺たちへの態度が横暴になつてるとかそんな感じでもないから今は気にしなくてもいいか。

それはともかく、何処にいても女子がシャルルを追って来るのだ。これではおちおち案内もしてられない。食堂にまで集団で押し寄せてきたときにはどうしようかと思つた。だから――

「こちらにきた、というワケですか」

「いや、ホントすみません」

「あ、ごめんなさい」

いつもの喫茶店に逃げ込んできた。

この喫茶店は、俺にとつてはやけに居心地が良い空間だ。どんなに授業がしんどい時でも、ここに行くときは足取りが軽くなるような気になる。それこそ、朝に女子に追いかけられた時なんかは窓を突き破つてもここに逃げ込もうかと思つたくらいだ。

「大丈夫か、シャルル？」

「はあつ、はあ……うん、なんとか。ありがとう、一夏」

「おう！」

お互いに一息をつく。さつきから全力疾走だったせいでいつの間にか肩で息をしていた。というか俺は勉強はともかく体育には割と自信があったのだが、何故こちらの全力疾走に彼女たちはついて来られたのだろうか。俺の運動神経がもしかするとI S 学園の学生の平均なのだとしたら……。

考えないことにした。現実逃避とも言う。

二人用のテーブルに揃って突っ伏していると、いつの間にかその上には水のはいったグラスが置いてあった。

「いつの間にも!？」

マスターは俺達の驚きように悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「マスターとしての嗜みです」

その言葉に、シャルルはほう、と息を吐く。

「一夏」

「なんだ？」

「ジャパニーズニンジャは実在したんだね」

「絶対違うと思うぞ」

確かに足音しなかったし気配も分かんなかったけどさ。

「そういえば今更だけど」

そうシャルルは前置きをした。

「ここって男の人がマスターなんだね」

「そうなんだよ。だから俺も気楽にココに来られるんだ」

「……? どういうこと?」

「クラスメイトの皆には悪いと思ってるんだけどさ。……やつぱり、女の子ばかりの空間ってのはなんていうか、どうしても疲れるんだよな。何処に行っても視線があつて、落ち着く暇もないっていうか。シャルルもそんな事はあつたら？」

「ほえ？ ……あ、う、うん！ 話しかけられたら中々断りにくいし、やつぱりちよつとしんどいなーつて思う時はあるよ」

話を振つてみると、ちよつと慌てたような仕草をしながら同意してくれた。やつぱりフランスの男性つてのはこういった紳士的な人が多いんだろうか？ より傷つける事無く、というニュアンスにそういう事を思いながらも愚痴を吐く口は止まらない。

「だろ？ 今までみたいに弾——あつ、中学生の時の同級生で親友のヤツなんだ、ソイツらとバカな話とかも出来なかつたし、正直初めの時はしんどかつた」

そりやもう辛かつた。

確かに、興味本位で打鉄に触つてしまったのは俺が悪いと思ってるし、色々と迷惑をかけて申し訳ない、とも思う。

だけどそれとこれとはまた別の問題っていうか。女子の話題なんて分からないし（分かるのは精々料理とか家事とか）、いきなり話を振られても周りには頼れる人もいないし。セシリアに喧嘩を売つてしまつて色々と言われた時も辛いものがあつたし、そんな俺の心なんて読める人もいるわけが——いるっちゃいるけど、でも片方には連絡したく

ないし、もう片方にもあまり頼りたくなかった。

実際に試合をしてからはちゃんと仲直り出来てよかったと思う。もしもあのまま喧嘩しっぱなしだったら俺のメンタルはもっとボロボロだっただろう。

しかもその後はこの店を見つけれられたのは俺にとつて恐らく最大級の幸運だと思う。マスターは「中々の観察眼」なんて言っていたけど、そんな大したもんじゃなくて、偶々見つけただけなんだ。

マスターには色々々と愚痴を聞いてもらっている。悪いとは思いつつも、どうしてもしんどい時やどうすればいいか分からない時、困ったらココに来て取り敢えずお茶を飲んだりもしている。マスターの淹れるお茶はどれもめっちゃくちゃ美味しく、ホツとして、一旦状況を見つめ直す余裕が出てくる。

女子ばかりの学園の中で、ここは俺にとつてはオアシスと言ってもいいくらいだ。愚痴を黙って、時にはやんわりとアドバイスをしてくれるマスターはやっぱり大人だなあ、と思ったりもする。

時折、態度が急に変わることもあったけど……でも、怒つてるとかそんなんじゃない、あれも単にアドバイスだったし。かと言って雰囲気が変わらないままにアドバイスをくれる時だってある。本当に不思議な人だ。

少し気になったのは、このお店の事をあまり他の人に教えないでくれ、と言われたこ

と。

「ワタシはマイナーな人間でいたいのですよ。メジャーデビューなんて、とんでもない！」

理由を聞いたけれど、目立ちたくないって事くらいしか分からなかった。メジャーデビューって、アイドルでもあるまいし。……あ、でも今の俺の境遇って、ある意味アイドルっぽいかも。嬉しくないけどな！

ある程度時間も経ったし、息も落ち着いてきた。

すると、カウンターに戻り棚を整えていたマスターがこちらへと顔を向けた。

「そういえば、そちらの方に自己紹介するのがまだでしたね」

「ああ、確かに！」

静かな足取りで俺たちの座っているテーブルへと歩いてきて、丁寧に頭を下げた。

「はじめまして、ワタシはこのお店でマスターをさせてもらっています。『ヒラサワ』などという名前はありませんが、どうぞマスター、とお呼び下さい」

「あ、はい！ 僕はシャルル、シャルル・デュノアです。マスター、どうぞよろしく願います」

「ふふふ、これはごく丁寧にどうも。それにしても……ふむ」

「な、なんですか？」

マスターは自分の紹介を終えると、シャルルをじいっと、観察するかのように見つめていた。それに気づいたシャルルは、少し顔を赤らめて胸を隠すようにして身を引く。なんかそれ、女の子みたいいなポーズだよな。見た目が中性的なせいかな、妙に似合っているのが可笑しかった。

「これはこれは、失礼致しました。キレイな髪をしていたものですから、つい見入ってしまった」

「え!? あ、えっと、ありがとうございます」

「え、まさかマスター……」

まさか、そういった趣味があるのか？ 疑惑の視線を向けていると、さつきも見せた悪戯っぽい笑みを深める。

「ふふふふ。一夏くん、今から少しタノシイ事をしませんか？」

「変態だー!!」

「冗談ですよ。ワタシの恋愛対象はキチンと女性ですから」

心臓に悪い冗談はやめて欲しい、マジで背筋が凍った。

そういうえば、こんなコントをやっているシャルルは気持ち悪くは無かつただろうか。

ヨーロッパって、同性愛が好ましくない、みたいな聞いたことがあったような……。
チラ、とシャルルを見た。

「う、うわあ。成る程、やっぱりジャパンでは禁断の関係があるんだね……！」
凄くキラキラした目でこちらを見ていた。

見なかったことにした。

「シャルルさん」

マスターが苦笑しながら首を振る。

「……………え!? あ、いやこれは……違うよ! 違うからね!」

こちらに詰め寄りながら、「違うんだよ一夏!」と叫ぶシャルルから一步身を引く。特に今は恋愛なんかに興味はないけど、流石に男子と付き合う趣味はないからな。なんて。

「だけど、やっぱり相手が男子だとして気楽にからかえるからいいな。ちよつとここはこのノリを続けてみよう。」

「シャルル……お前、まさか」

「だ——! もうっ! 違うって言うてるじゃないか!」

「おわっ!?!」

さっきまで二人して逃げていた筈なのに今度はシャルルが俺を追いかけ始めた。やっべ、タノシイ……………はっ!?

マスターを巻き込もうとさっきまでいた所を見ると、またいつの間にかカウンターの方へと戻っていた。速っ!

……………今はシャルルから逃げるのを優先するかな。

「マスター、ありがとうございました!」

「あー! 逃げないでよ一夏! あっ、ありがとうございますっ」

やっぱ男子っていうのはこうしてバカ騒ぎするのが一番だよな!



これは、一夏が箒やシャルロットなど、専用機持ちを引き連れて喫茶店に訪れていたことのこと。

皆でお茶やケーキを楽しんでいる中、ふと一夏は気になったことがあった。

「そーいや、このお店ってなんか名前とかあるんですか？」

「はい、ありますよ。どちらにしる貴方がたには教えたかったのでちよいどいい機会です」

まるでその言葉を聞きたかったかのようにマスターは喜々とした笑顔へと変わる。それは自慢をしたがる子供のような、純粋な笑顔だった。

磨いていたグラスを置き、格好をつけるように両腕を左右に広げた。その格好は、あの鬼教官からすれば殺意が湧くほどに似合っているとと言われるほどであり。

そしてまた、彼女以外の人間からすれば。何故か酷く、安心した気持ちになるような、不思議と落ち着くような……ごくごく自然な格好に感じられた。

「ここは、隣人との友情を。愛を。憧憬を発見する所。また、自分が持つ様々な感情と向き合い、そして落ち着ける場所、心のクリニック——ナース・カフェ、です」

シヤルロット・デユノア①

場所はIS学園の食堂。食券を買う所と配膳口の付近が毎日凄く混雑している一方で、返却口が遠いという事もあって中々人がいないところも存在する。

例えば、隅のほう、とか。

そして隅の方のさらに隅っこの方には、じいっと見ないと誰も分からない、目立たない扉がある。

そこを開けると……。

「いらつしやいませ」

若い（と思われる）マスターが出迎えてくれる、喫茶店がある。

「マスター、こんにちは」

「おや、シヤルロットさん。こんにちは」

カウンターに座るとお冷を渡された。それを口に含んで落ち着いた後、早速本題に入る。

「早速使ってみましたよ、あれ！」

「ほう。どうでしたか、ワタシ特製の楽器——チューブラ・ヘルツは」

「えっと、まず——」

チューブラ・ヘルツ。僕のラファールに試験的に組み込まれた武装で、なんと開発・調整はこのマスターだ。

パイプオルガンのような管をトリガーにして、それを引くと音が鳴る。管の長さによつて音の高さは違うんだけど、その音の高さの違いがこと武装の最大の特徴だ。

チューブラ・ヘルツには攻撃だけでなく補助や妨害機能も充実していて、それぞれに対応した音楽をタイミング通りに鳴らす事で全てに対応出来る。その代わり、明らかにタイミングがずれた瞬間また鳴らし直し、というデメリットも存在する。また、拡張領域をかなり大きく喰うのもデメリットだ。

だけどその欠点を踏まえてもかなり優秀な武装だし、何よりも結構楽しい。飛行しながら使用するのは難易度が高いつても高いけど、上手く演奏が出来た時の達成感、相手のハイパーセンサーを惑わせる楽しさ、もとい愉しさ。ワケの分からない武器で勝つた時の相手のワケが分からないという顔を見た時の愉悦。全てが私を……………。

いや、待って。そもそもだ。

「なんで武器が作れるんですか!？」

「ふふふ、マスターの嗜みですよ」

「マスターになる敷居が高すぎるよう……」

IS学園のマスターは武器の開発や整備なども出来ないといけないのだろうか？

いや、でもマスターは喫茶店のマスターなんだから別にISの改造ができる必要はない筈なんだけど……。その内男性IS操縦者もマスターの嗜みとか言っただけで怖い。

「それにしても、楽しく使えて頂けたようで」

「あつ、はい！ 使いにくさはあつたけど、今までこんな武器が無かつたのでとつても……つて、そもそもこんな武器あるわけないじゃないですか！」

「それはそうでしょう。ワタシが初めて開発したのですから」

こんな武器がちゃんと攻撃になるなんて、皆思うわけもないしね。仕組み自体も詳しくは分かつてない。『MIDI』っていう、昔使われてた音源？ みたいなのが使われて

るらしいんだけど、そのMIDIについて知ってる人は本当に少なかった。というか、先生や事務員のおじさんしか知らないみたいだ。

……織斑先生には聞いてないよ？ 怖いから。

で、MIDIから出る音を相手のセンサー類やらに影響を与える電波に変換したり超音波やビームに変換したりするなんやかんやがあつてあなるらしい。マスター曰く、「禁則事項です」

とのこと。

私には秘密事に首を突っ込む趣味もないし、別に使っていて不具合が起こることもないので気にしない事にした。

そもそも、私達はマスターに関して知らないことが多すぎるのだ。

「年齢は？」 「秘密です」

「年収は？」 「禁則事項です」

「休日の過ごし方は？」 「禁則事項です」

「得意教科は？」 「禁則事項（ry）」

「何処に住んでいたの？」 「何処かです」

「好きなタイプは？」 「かくとう・エスパーです」

「そうじゃない」

「異性の好みは？」 「秘密です」

いやどうしろと？

と、いうように、中々隙を見せてくれない。

「ワタシの事を知りたい時は、まずは現象の花の秘密を暴くことからです」

とか言ってたけど、現象の花の秘密が何か、がまず分からないからどうしようもない。そんな謎な人だけど、私にとっては道を示してくれた恩人でもあるんだ。

今でもハッキリ覚えてる。そう、あれは



私が『シャルロット・デュノア』として初めてマスターに会ったのは、タッグトーナメント戦が終わった後だった。謝らないとは思ってたんだけど、中々タイミングが掴めないまま——今に至る。

「うう、緊張するなあ」

一夏や他の皆には許してもらえた。だけど、じゃあ他の人にも許してもらえるなんて甘い考えなんて出来るわけもない。いや、一夏はそう思ってるのかもしれないけど。彼は優しすぎる人だから。

でも、恨まれても何かお小言を言われても、筋を通さなければ行けない時っていうのはある。この前来た時は軽かった扉を重く感じたまま、ゆっくりと開いた。

「いらっしやいませ」

軽い鈴の音と共に前と同じような声。きつといつも変わらないであろうそれも、妙に恐ろしく感じる。

「ああ、シャルルさん。いえ……シャルロットさんの方が宜しかったですか？」

「シャルロットで、お願いします」

私が男装していたことを皆に伝えた後とはいえ、伝達速度が早すぎるような気がするのだが、気の所為なのだろうか？

「あの、騙してて、済みま——」

その謝罪は、目の前のマスターの一言によってかき消された。

「ああ、謝らなければいけないのはワタシの方なのです」

「え……………」

どういう事なんだろう？ マスターには何の非も無いはずだ。少なくとも私は何もされていいのだけど。

だけど、マスターの謝罪は全く違うベクトルのものだった。

「貴女の身体が女性であると言うことはひと目見た時から見抜いておりました」

「……………えっ？」

あまりの驚きに身体が固まってしまった。え、じゃあ……………私が男装してここに入っていたことを知った上で男性として接していたという事？ なら、その理由は……………？

「そ、そうなんですか!？」

「マスターですから」

……………もしかして『シャルル』のまま他のバーに行っても見抜かれていたのだろうか？

いやでも、他の子達にはバレてなかったわけだし！

「ただ、精神が男性の方……………つまり、性同一性障害の方だとばかり」

「え、ええ？」

予想だにしていなかった答えが帰ってきた。少し混乱した頭をなんとか鎮めて考えを纏める作業に入る。

つまり、身体は女の子だけど中身は男の子だと思っただから、男性操縦者の一人として接した……という事なのだろうか？

確かにそれを聞くとなんだか複雑な気分になってしまったが、それでも私がやった事は消えないわけなので謝らなければいけないのは変わらない。制止の声を無視して頭を下げた。

「でも、それでも、すいませんでした！」

——コト、とカウンターに何か置かれた音がした。少し顔を上げてみればその正体はキレイなティーカップ。

頭を上げて下さい、と優しい声で言われたのでおずおずと頭を上げる。

カウンターの先には、前と変わらない優しげな笑顔が待っていた。

「勿論ワタシは怒っていませんよ。——よく、頑張りましたね」

「っ」

………なんなのだろう、一夏に抱いた想いとはまた違ったこの温もりは。

恋愛感情じゃない。

友情でもない。

まるで、母さんに褒められた時のような、そんな気持ち。思い出せるはずなのに、うまく表現が出来ない。

自らが生んだ感情に疑問を抱いたまま、出された紅茶を口に含んだ。

爽やかな風味の中で香る甘さ。一見相反するかもしれないその二つは決して混じらずお互いがお互いを活かし合うように揺れ動く。

底に少し沈んでいるドライフルーツの甘さや酸味は少し強いけれど、その瑞々しさは私に元気を与えてくれるようで。

故郷の、味がしたような気がした。

「これ………飲んだことがある気がします」

「マリアージュ・フレールの『ハッピー・バースデイ』という銘柄です。日本で買うと高いのですが、ワタシに関してはおちよつとしたコネで安く仕入れられているのですよ」

「マリアージュ・フレール……ああ！　うちの！」

ええ、とマスターは柔らかい笑みを浮かべた。

「なんか、すつきりした味わいですね。なんだか、明日も頑張れそうな気がします」

えへへ、と笑っていると、彼はニコニコと微笑んだまま指を一本立てた。

「そんな貴女にアドバイスです」

「え？」

そして、マスターは目を閉じた。

「いいですか？　貴女にはこれから先、色々大変なことがあるでしょう。それは貴女の家庭だけではなく、IS学園での出来事でも。」

だけど今、この時は自分を祝ってあげなさい。

雲に隠れていた貴女の名前は、月、そして太陽により照らされたのでしょうか。

今日は貴女の始まりの日。窓にオーロラは舞い、空を包みます。

その時こそ夜が歌う時。

貴女の誕生を祝う時。

その時に祈りなさい。貴女を包み込む宇宙に祈りなさい。

始まりは始まるのではなく、始まりへと還るだけ。

貴女の願いはオーロラが聞いてくれる。叶う時はきつと、再びオーロラが舞う日。

そして貴女は如雨露になる。

目覚めてしまったが為に貴女は隠れてしまったのかもしれないませんが、太陽の蓮は貴女を見つけてくれた。

満ちて花開く太陽に寄り添い歩むことで、きつと丘は応えてくれる。

目を見張り、願ひ、そして歩くのです。

もしも蓮が枯れかけたら水を与えなさい。黄泉帰らないように、そして蘇るように。水が廻り、再び蓮を咲かせられるように。

それが如雨露の役割なのです」

「おー、ろら」

月。

太陽。

蓮。

夜の歌。

そして、如雨露。

いきなり並べられた意味不明なキーワード。普通に考えればこの地でオーロラなんて出るわけもない。きつと普通の人からすれば、マスターはおかしいのだろう。

……なのに。

与えられた詞は、きつととても大事なような気がした。彫りつけるように記憶付ける。いや、彫らなかつたとしても……絶対に、これは消えないだろう。

私はマスターに何を返せるのだろうか。行先を覚えてくれた彼に、何が出来るのだろうか。……考えるのは後だ。考える前に、まずやるべきことがある。

「マスター、ありがとうございます！」

御礼の言葉は意識せずとも出てきた。なら、後は気持ち添えるだけだ。

一夏と母さんには見せたことのない、私の最高の笑顔で。

私はこの日を一生忘れない。『僕』が眠り、雲に隠れて『私』として生き始めた日。

そして、夜中にオーロラを見た日。



目の端に涙を浮かべながら、それでも笑顔で出ていったシャルロットさんを見送ったあと、静かに独りごちた。

「それにしても、I S委員会も中々質が悪いことをするものです。デュノア社の社長の性格の悪さも……いや、親バカ具合も中々ですが」

そもそも男装といった、バレた場合のリスクが大きすぎる事をせずとも、ハニートラップや単に仲良くなつて聞くほうがローリスクではないか。色々子への風当たりが強い中、I S学園に逃してやりたかつたというデュノア社社長の気持ちも分らないが、それにしてももう少し賢いやり方があつたらうに。

しかも、データの収集などという大嘘を信じさせて送り込むのだから面倒臭い。夫人の追求を躲す為だとは思われるが、それで愛娘に嫌われては本末転倒だろうに。そこまでして助けたいのなら、もっと表立って行ったほうが良かったのではないだろうか。

まあ、他所の家庭の事情にこれ以上踏み込むつもりはワタシにはない。だが、何も知らなかった哀れな子に少しばかりの同情を覚えるのも事実。先輩はこの件に関しては沈黙を貫くつもりだろうし。

ここは一つ、理由付けを増やしてやるとしよう。そうと決まれば早速実行だ。

「久しぶりに取り掛かるとしますかねえ。腕が落ちていないといいのですが、どうにも

自信がない」

試作楽器のテストパイロット。うむ、中々オモシロソウな響きではないか。

▽
▽
▽

全てを知った彼女は社長に対しある程度怒りを覚えたものの、最終的には和解出来たという。いやはや、これは社長が大泣きしたことだろう。良かった良かった、もしも話が拗れたまま倒産してしまつたら——安く紅茶が仕入れられないではないか。

テストパイロットの件については既に了承を取つてある、逆にお願ひされたくらいだ——し、恐らくもう暫くは彼女は楽しく日常を過ごせることだろう。その間に事態が好転するか、それとも悪化してしまうのか。それは確率の丘が示してくれるだろうし、ワタシがどうにかすることもない。

ワタシが彼女に望んでいる最も大きな役割——創作楽器のモニター。

これに協力してもらえるのはとても大きい。リヴァイヴの汎用性に感謝、そしてシャルロットさんの要領の良さには圧倒的感謝だ。

「次は何を創りましょうかねえ」

そうだ、レーザーハープなどはどうだろう。きつとまたオモシロイ出来になるに違いない。

シャルロットさん、楽しみに待っていてくださいね。

篠ノ之 箒①

IS学園の食堂、その隅も隅の方にあるこじんまりとした扉の奥にある喫茶店。ワタシの勤務地であり、身や心を疲れさせた方々が訪れる静かなカフェだ。そこでマスターであるワタシは一体何をしているのか？

「全く、一夏の奴はまた……」

「まあまあ落ち着いて下さい」

「分かってはいるのです！ ですが、むむむむ……」

絶賛箒さんの愚痴を聞いていた。彼女、少し愚痴が多すぎやしませんかねえ。基本、重い女性というのは中々好き嫌いが別れるものなのだが、彼は一体どちらのタイプなのだろうか。

……彼の話を書く限り、周りに重い女性しかいないようではあるが。箒さんを筆頭に、シャルロットさん、鈴音さん、あとは更識姉妹も相当重そうだ。セシリアさんとうらさんはまだ寛大な方だろう。まだ。

誰も彼もが美人、若しくは美少女であるために傍から見れば羨ましいのであろうが、こうして見ている側としては一夏くんがとても心配になってくる。女難の相でもある

のではないだろうか。

ここまで来るとワタシとしても全然うらやましくない。まあそもそもワタシは別に鈍感ではないので、ああなることはないと思われるが。

そもそもこんな事をしているのには、ちよつとした作戦があつたりする。名付けて、『(一夏くん) 救済の技法作戦』。その初めの標的が彼女なのだ。



最近、よく一夏が行方不明になる。いつも留守なので一時間後くらいにまたドアを叩いてみるといつの間にか帰ってきている。何処に行っていたのだと聞いても、

「なんでそこまで俺が教えなきゃいけないんだよ」の一点張りで全く教えてくれなかった。

怪しい。非常に怪しい。

そう思った私が一夏を尾行し、それを見つかるまでさほど時間はかからなかった。

殆どの人が気づかないような、隅の方にある扉の向こう側。

一夏はそこに通っていたのだ。

どんな女が一夏を誑かしているのかなどと思いながら扉を静かに開けてみると、そこには柔らかな表情で皿を磨いている男性が一人いるのみだった。

「いらつしやいませ。夜分遅くに珍しい」

「あ……」

「ああ、これはこれは篠ノ之箒さん。こんばんは」

「ええ、こんばんは。あの……」

一夏はどうしてここに？ という疑問をそのまま初対面の人間に言ってしまうのはどうにも気が引ける。だが、聞けなかつたそれをなんとなく彼は察してくれたようだった。

「ああ、一夏くんですか。彼はよくここにお茶を飲みに来てくれるのですよ。マスターとしては嬉しい限りですなえ」

「マスター……?」

「申し遅れましたね。ワタシはこの喫茶店『Nurse Cafe』でマスターを勤めさせて頂いております。一応ヒラサワという名前はありますが、どうぞマスターとお呼び

「下さる」

「分かりました。あの、他に従業員の方はいらっしゃらないのですか？」

「はい。まあご覧の通り狭く静かな空間ですので、他に従業員を雇う理由も特にはないのです」

成る程、ということは一夏が他の女に靡いた、などということはまずないだろう。いやそもそもよく考えろ、アイツが簡単に女に靡くか？ 小学校の頃から人気があったが、そんな印象など何処にもない。

つまり、私のこの行動はただの空回りだったということだ。

今までの勘違いで少し恥ずかしくなってきた。今すぐにでも帰って寝たい気分だが……。

「取り敢えず、お茶など如何ですか？」

……マスターの言葉に従おう。

「日本茶はあるか？」

「勿論御座います。少々お待ちを」

そう言うとかウンターの奥にある棚、冷暗室だろうか？ から一つの筒を取り出し始めた。待っている間にでも落ち着こう、そう思いながら目を閉じた。

暫くして、「お待たせしました」の声。

それに釣られて目を開けると、私の目前には上品な柄をした湯呑みが一つ置いてあった。そしてそれにマスターが急須から茶を流し始める。

とても透き通っているキレイな緑色が湯呑を満たしていく。雰囲気が違うせいか、普段よりもそれはとても美味しそうに見えた。

「では頂きます」

マスターが笑顔で頷くの合図に一口含んだ。

「静岡県は掛川の『さえみどり』を淹れさせて頂きました。どうですか？」

「どうですって……それって確かかなり高いお茶だと思うのですが」

「はい」

「そんな高級品を一生徒に出して大丈夫なのですか……？ まあ、兎に角。とても上品な香りがします。渋みが少ないから飲みやすいし、何よりとてもまろやかだ。淡い甘みが落ち着きますね」

「……お家の環境もあるのでしょうか、ここの生徒はやけにお茶に関してのレビューが細かいですねえ」

「はい？」

「いえ、独り言です。お気になさらず」

ニコリと笑うマスターになんとなく圧されながらお茶を飲み進める。全く飽きがない味だ。これが高級茶、篠ノ之家で高級茶を淹れていた事も稀にあったが、その時もとても美味しかったのを覚えている。あの時は珍しく姉さんもお茶だけ飲みきたのだったか。

「そういえば」

と前置きしながらマスターが他所を向いて喋り始めた。

「最近、また一夏くんが傷を増やしてしましてねえ。苛められているのかと考えもしたのですが話を聞く限りどうにもそういった気配も感じない」

「う……」

凶星、それも思わずいじめ問題にまで発展しそうになっていた事に気づいて思わずうめき声を上げてしまった。気づいてくれるなど思ったりもしたが、そう都合よくなど行きはしない。

「ほう、何かがあるとは思っていましたが……成る程、そういうことだったのですね」

……第三者にジト目で見られるとかかなりの罪悪感が押し寄せてくるものだ。だが、そもそも一夏に問題があるだろう。少し目を離せば他の女に囲まれて……全く！

なんてことを思っていると、いつの間にかマスターの目はハッキリとこちらを向いて

いた。

「篤さん。お聞きしますが、男性が女性を殴るのは果たして許されるでしょうか？」

「許されるわけがないでしょう！」

……いきなり何を当然の事を言っているのだこの人は？

「そうですね。では、女性が男性を殴るのは許されるのですか？」

「……っ」

一瞬、返答に詰まった。

当然だ。同じく許されるはずがない。だが、もしそう答えてしまえば私自身がその許されない事をしていることになってしまう。

そんなプライドが邪魔をして、「許されない」と口に出すことが、出来なかった。出たのは誤魔化そうとする浅ましい言葉だけ。

「……それは、でも！」

「どのような理由があるにせよ、暴力はいけません。感情を爆発させる度に手が出るようでは、それは男性女性以前に人として問題アリ、です」

「別に誰彼なく手が出るわけではありませんっ！」

「彼なら許されるのですか？ 彼なら殴っても蹴っても良いと考えている、そう判断させて頂いて宜しいのですか？」

何も返すことが出来ない。

「貴女が学んだ籐ノ之流というのは、想い人に対し気に入らないことがあると暴力に走ることを許す流派だったでしょうか」

反論すら許してくれない。

「勿論、貴女のお気持ちも分からなくはありません。時は全ての人に波を立て急激な勢いで襲ってきます。いつの間にか皆が大きくなっている。全てが変わっている。特に白騎士事件があつてから、時間というものはまさに津波となりました」

「……………」

「政府保護プログラム、でしたか。あれにより心の拠り所を失った事、事件に身内が関わっている事。ええ、貴女は激動の人生を送っている。それも、中々生きづらい人生を」と、ここで一つの疑問が浮かんだ。

何故この人はこんなに沢山の情報を持っているのだ、と。

だが、そんな思考を目の前の彼は許してはくれなかった。

「ですがそれは、彼を殴る理由にはなりません」

そして、気配が変わった。殺気が生まれた。寒気がするくらいのソレに思わず吞まれ

そうになる。

「オマエはただの Berserker^{狂人}だ。

オマエの力は何の為に？ 何の為に力を得たのだ？

自らの信念の元に力——Forceは使われるべきなのだ。決してチカラとは責任だ。大いなるチカラには大きな責任が伴う。

撃たれた鳥のような優雅さを忘れてはならない」

「撃たれた鳥、優雅さ……？」

最後の一文だけが分からない。

撃たれた鳥。恐らく鉄砲か何かだと考える。だが、優雅さとは何だ？

思考に没入したいのに、胸を打つマスターの声がそうさせてくれない。

雰囲気、そうさせてくれない。

「オマエの舵を取るのオマエだ。

どの道に生きるのか。何を成そうと努むのか。

全て、オマエが決めなければいけない。

だから舵を取れ！

オマエが目指す自身になれるように。

舵を取れ！

オマエの憧れへ追いつくために。

舵を取れ!

誤った行き先から針路を変更する為に。

——そして最後に、正しくあれ。

どれだけ失敗しようとも。どれだけ悔いようとも。どれだけ妬んだとしても。

オマエが望む未来は、まだ遠い。だからこそ、負の感情に操られてはならないのだ。操られれば操られるだけその未来は遠くなる。決して訪れなくなってしまう可能性もある。

オマエの想い、オマエの信念。オマエの苦しみ、喜び、哀しみ。

無限に道は広がっている。オマエを構成する全てが道標になるだろう。

さあ、選べ。オマエたちの目指す未来の為に!」

最後にひときわ大きな声で叫んだかと思うと、そのまま数秒ほど動かなくなった。私も、動けなかった。

自分に問う。

あの日決めた私の道は何処へ行った？

まだ私は小さな子どものような我儘な想いを彼に向けるのか？ 素直になれないままで？

……いや、それではきつと駄目だ。アイツは鈍感だから、このままじゃ一生私の想いは届かない。

だから、まずは私が変わろう。私の舵があるとすれば、今が針路変更の時だ。私が正しくあるために、正しき力を得るために。

一つ、大きな深呼吸。

そんな簡単なことさえ理解しようとしなかった、私に別れを告げるために。

「……………まだまだ、未熟、ですね」

「はい。ならば、貴女はどうすればよいでしょうか？」

「決まっているでしょう」

やるべき事は決まっている。

「頑張って謝ってきます。私は……………その、中々素直になれないですけど。でも、今なら

きつと出来る気がするんです」

「ふふふ、そうですね。ではワタシは成功を祈ることにしましょうかねえ」

頭を静かに下げてお金を払い店を出た。

店に入る前、あんなに腹に溜まっていたドロドロとした怒りは、今では奇麗さっぱりと消えていた。

とても、清々しい気分だ。

そう、今ならきつと素直になれる。マスターにこう宣言してしまったのだから、きちんと有言実行せねばならない。

真つ直ぐに進むのが、私の道の筈だから。

▽
▽
▽

「で、今週は何回やらかしましたか？」

「言い方が失礼ですねマスター。0回に決まっているではありませんか」

「夏くん」

「一回やられました！」

「お、おい一夏!」

その後。まあ、順調に箒さんは暴力に訴えかける回数を減らしている。願わくば0回を続けて欲しいのだが、二、三週間に一回は手が出てしまうようだ、とは一夏くん、つまりは被害者側からの証言。

「なんてことをしてくれたのだ!」「やったのはお前だろ!」という言い争いを尻目にグラスを磨く。……うむ、最近ワタシの技術がグングンと伸びている。良き傾向だ。ま、そんなことより。

「箒さん」

「は、はい……」

「今週は一回との事なので、そうですね……。今日の一夏くんの会計は箒さんに払っていただきましょうか」

その瞬間、一夏くんの目が輝いた。

「マジっすか! じゃあマスター、チーズケーキと前のアールグレイ一つ!」

「ちよ、ちよつと待て一夏。落ち着こう。な?」

箒さんはそんな彼を見て冷や汗を垂らしながら、なんとか宥めようと肩に手を置いた。少し顔を赤らめているのがとても青春しているようで微笑ましい。

「いやー、ありがとう箒! 俺、嬉しいよ!」

「全然嬉しくないのは何故だ……」

そんなやりとりを目にしながら紅茶の用意を始める。ケーキはすぐに準備出来るが、紅茶は中々難しいのだ。少し時間を掛けたほうが美味しかったりする銘柄もあれば、あまり濃くない方が評判が良いものもある。今回は前者なので、少し早めに準備をする、というわけだ。

最近、鈴音さんからの暴力も減っているという。どうやら箒さんが我慢を覚えたことにより危機感を覚えたようだ。と、これはあくまでワタシの予想。本当の所はどうかは知らないが、少なくとも低い確率ではないと思う。

ともかくこれはいい傾向だ。ただでさえ彼は精神的に大きく傷ついているのだから、肉体的にも傷を増やしていればその内彼は完全に壊れてしまうだろう。本来であれば大人が支えるべきなのだが、不幸な事にその大人が周りには殆どいなかった。彼女は実に難儀したことだろう。いや、現在進行形で難儀しているのか。

箒さんが舵をとる方向は、願わくば彼を支える方向であってほしい。そんなことを祈りつつ準備を進めていると、扉から鈴の音が聞こえた。今日のナースカフェは賑やかになりそうだ。

さて、今日もまた楽しい一日になりますように。

「はつしやん」

織斑 千冬①

IS学園には門限が存在し、それ以降部屋の外を出歩くことは原則として禁止されている。通路には日々学園の教師たちが交代制で見回りを行っており、またその教師の中でも最もこの見回りをしている事が多いのが……。

「来たぞ、マスター」

「いらつしやいませ」

目の前にいる、第一回モンド・グロツソの優勝者である織斑 千冬さんだ。

「ふう、随分と久しぶりの気がするな」

「そうですねえ。お仕事の方は大変そうですね」

「全くだ。今年の入学生も私を見るなりキヤイキヤイと喚き出すし……あれが若さなのか」

「いえいえ、あれは一流芸能人を見た時のギャラリーのようなものでしょう。先生はまだまだお若いですよ」

唐突に雰囲気が悪くなった彼女に、慌てて声をかける。このまま酔われると実に面倒だからだ。普段から冷静であるように心がけているワタシであるが、彼女の悪酔いした時だけは必死にならねばならない。

「今はプライベートだ、平沢」

……全く。この人の仕事とプライベートの切り替えスイッチはどれ位のスピードで押されているのか。毎回毎回被害にある一夏くとワタシ——いや、私の身にもなってもらいたいものだ。

「はいはい、分かりましたよ、せん……じゃなかった、千冬さん」

そう、私にとって彼女——千冬さんは中高においての先輩であり、私がここで働くことになった切欠になった、そんな存在なのだ。良い意味でも、悪い意味でも。

「何を飲みますか？」

「ビールだ。プレミアムモ〇ツを頼む」

「ここにはもつといいお酒があるんですがねえ」

もつと頼むものがあるだろうに。日本酒やワインは良いものを揃えているのだが、私はビールだけはどうも好きになれない為にどうしても手を出せずにいる。マスターとして、出来るだけ美味しいものと考えながら様々なお茶やお酒を味見して仕入れる品を選んでくれる私だが、どうにもビールには疎い。

前に「中々ここには売られていないようなモノを仕入れてみよう」と考えてナギサビールや網走ビールの商品を仕入れてみたのだが、目の前にいる先輩に、
「プレミアム〇ルツの方が美味しいな」

と断言された記憶があるため今ではビールはそれしか仕入れていない。

決して拗ねてなんかいない。

「はい、どうぞ」

「ああ。……………ツぶはあ！ やっぱプレミアムは最高だな！」

「一応サントリーから独自ルートで仕入れてますからねえ」

「お前のコネは相変わらず謎だな……………まあいい、私が美味しいビールを飲んでいるんだ、許

してやる」

「……千冬さん、中学校の頃の暴君スタイル復活させたんですか？」

「あの頃の事は忘れろ！」

付き合いが長いと、世界最強と呼ばれる女性の弱みなんかも握れることもあつて中々悪くない。理不尽な要求に襲われることもあるが……まあ。

「まったく……」

顔を少し赤らめ、目を逸らしながらビールを飲む千冬さんを見られるだけで私にとつてはプラスなのだ。

「お前は今年もあの訳の分からない言葉を使うつもりなのか？」

「使うときが来れば使いますねえ」

「そうか……」

何故彼女は私の言動に気を遣うのか。これには理由がある。

そもそも私が「ワタシ」を始めたのは十中八九この人のせい……というのは悪いか、切欠になったのは確かではあるが。まあ、事情が事情だったということだ。

そしてそれを千冬さんは未だに気にしている節がある。というか間違ひなく気にしている。この人の良くない癖は他人には頼れと言う癖に、自分は悩みや苦しみを一人で

抱え込む所だ。そして先程目を逸らして恥ずかしそうにしていた顔は、今は少し落ち込んでいるようにも見える。

……こういうのを無視できないのは、私の悪い癖なのだろうか。

「それで、今回はどうしたんですか？ 私で良ければ聞きますよ、今夜は他に誰もいませんし」

「……悪い」

彼女は少し、甘えることを覚えるべきだ。環境が環境だったとはいえ、今ではきつと一夏くんも成長しているだろうし、周りに友人もいるのだから。それでも甘えられないのなら、私が甘やかす。

やっぱり私も千冬さんのファンなのだなあ、としみじみ思わされる。

「……一夏がここに入ってきたのは聞いているだろうか？」

「勿論。あの時は私も大層驚いたものですから」

「そうだ。あいつはISを動かしてしまった。奴が言っていた”ISには意志がある”という話から考えると、もしかすると初めにISに乗った私のせいで一夏も巻き込まれたんじゃないかと思うと、な」

そう語る千冬さんの顔は赤らんではいるものの、暗い。今すぐ励ましたい思いもある

が、それはカウンセリングとしては悪手だ。

「成る程」

まずは最後まで話を聞くこと。後悔や思いを全て吐露させた上でどうするかを考える。

マスターの基本だ。

「それに」

「？」

「初日から、他の奴らが見ている前で思い切り頭を殴ってしまった」

「……………」

それはちよつと貴女が悪いんじゃないだろうか。

その後も様々な話を聞いた。

一夏くんになにもしてやれていないこと。

頼れる友人がいないのにも関わらず放り込んでしまったこと。

委員会の介入を阻止しきれなかったこと。

他の人に素直になれないこと。

全てを吐き出した時には、千冬さんはもうかなり酔っていた。

「随分溜め込んでいましたねえ」

「……………悪い」

ああ、全く。

「本当に、貴女は悪い御人だ」

「え…………？」

「そんなところで謝られては許す以外ないではないですか。そうでないと、私はまるで悪人のようだ」

そんなに悲しそうな顔をされては、笑って許す事しか出来ないではないか。

「一度責任を感じるとすぐ溜め込んだり謝ったりするのは貴女の悪い癖ですよ。」

私が聞きます。私が許します。だから、あまり自分を傷つけないで下さい」

「……………しかし」

……………少し、焦れたい。とつとと了承してくれればいいのだが、この人はどうにも頭が硬すぎる。こういう時は『ワタシ』の定番だ。

「大体、一夏くんはちゃんと分かっていますよ。自分が、貴女に護られながら育ってきたことくらい」

「だが」

「彼が自分で言ってるんですから。ふふふ、こういう情報を得られるのは同性の強みです。まあそれは兎も角。一夏くん、昔はこんな事を言っていましたよ。『何時か、千冬姉を守るくらい強くなるんだ！』」

「っ！」

「『俺はガキだからまだ護られてばっかだけど……でも、強くなる！強くなつて千冬姉に』今まで護つてくれてありがとう、これからは俺が守るよ」つて言うんだ！……と」
これを聞いたのはもう何年も前だったし、ワタシはあの時と髪の色も雰囲気も違うから、彼はきつと暫くワタシには気づかないだろう。初見で見破れたら褒めてあげよう。

さて、ここからだ。

「貴女は不思議な鏡なのです」

「……鏡？」

「ええ。影絵のようにも、月明かりのようにもなれる不思議な鏡。

影絵は教えます。空の飛び方を。

月明かりは教えます、夜の歩き方を。

貴女のお陰で一夏くんは熱血漢な子に良い子になり、ワタシはこうして夢を叶える事が出来ました。ワタシ達は二人共、貴女という鏡、いえ……鑑を見て歩いてきたのです」

「……」

彼女は何も話さない。今のワタシを知っているから。

「夏くんが貴女を護るのなら、ワタシは月明かりになりましょう。

貴女の道は霧一面の獣道。険しくて厳しい、孤独な道。

だからワタシが照らします。獣道を抜け、幾つもの世界、幾つもの光が見られるように。

雲を超え、霧を突き抜けて。

貴女を良き道へと導けるような、そんなマスターとなりましょう。

その後は貴女の弟と一緒に生きてくれる。

護ってくれる。

そして辿り着いた暖かな光の中で、ワタシ達は貴女に言うのです」

『おかえりなさい』と」

「そうか」

反応はたった一言。

「……」

「ふふ」

笑いに混じった、震えた声。

それを聴いた時、私の瞳は自然と閉じられた。

「まったく、みじゆくもののくせにくちだけはたっしやだなあ」

「ふふふ、すみません」

下を向いて顔を隠す千冬さん。勿論私はそれを見ようとはしない。

ここはナースカフェ。弱音も怒りも、全て吐き出せる場所。ここで私が干渉すると、きつとこの人はまた強がってしまう。

だから、それが終わるまで。

私はそつと、お茶を出した。

暫くして、顔を上げた千冬さんはお茶を飲み始めた。まだ少し目元は赤いが、もう大丈夫だろう。

「すまな……」

「ストップです」

迷惑を掛けてすまなかつた、そう言いたかつたであろう彼女の言葉を止める。私はこの人にこの場所について話しているはずなのだが。

「また謝ろうとしているじゃないですか。こういう時はお礼を言え方がいいですよ」

「お、お前！ 私がそういうのが苦手だつて……」

「知つてますよ」

「んなつ」

「ふふふふふ」

そう言つて笑つてやる。

こうすれば、彼女は怒つて私を殴る。それできつと元通り。全てを悟り、目を静かに瞑る。

「………全く」

だが、予想していた一撃は何時までたつてもやつて来ない。

訝しんで少し目を開けた。

そこには怒りの形相を浮かべた鬼の先輩の顔はなく。

ただ、少しぎこちない、笑顔があった。

クールな笑みではない、にこやかに笑おうとしている不格好なソレは、だがしかしあの時と同じ感覚を受けた時のもの。

まるであの時と変わらぬ美しいもので。

「ありがとう、シン」

その声はとても小さかったけれど。
だけど。

ああ、どうしようもなく私は彼女に惹かれていたんだなあ、と。再度確認させられる
ような、ふんわりとした柔らかいものだった。

篠ノ之 束①

I S学園の食堂。

その隅には、生徒の殆どが知らない喫茶店がある。

何故か気づかない不思議な扉。

I S学園内でも生徒や教師の一部しかそれを知ることではない。況やI S学園外の間でこの喫茶店を知るものはほぼ皆無と言っていいだろう。

……ただし、ごく一部を除いて。

扉が乱暴に開かれ、唐突に現れた一人の女性。

「やあやあやあやあ！ シンくん、今日も元気にやってるね！」

「……………貴女はまたセキユリティを抜いてきたのですか、元気ですねぇ」

『私もいますよ、進一様』

「マスターと呼んで下さいと言っているではないですか」

彼女（たち）こそが、そのごく一部である。

そしてそのごく一部は唐突に表れるのがまた質が悪い。ちゃんとアポイントメントを取るべきではないのだろうか、社会人として。

いや、社会人……？ まあ、博士だから社会人だろう。

兎も角、そんな彼女とはこれまた学校の先輩に当たる。千冬さんと違いれっきとした接点は無かったものの、ある時から色々とちよっかいを掛けられるようになった。なつてしまった。

そんな彼女が言うには、「凡人の癖に狂ってる。狂ってる癖に凡人でいられる。キミは頭がおかしいよ」。

なんて失礼なのだろうか。ワタシは自らを凡人であると認めたことはあつても狂つてゐる等と思つたことは一度もないのに。

閑話休題。

さて、そんなごく一部である彼女たち。篠ノ之東さんとクロエ・クロニクルさん。

天才はどこか頭のネジが一本抜けている、などという話を聞いたことがあるが、彼女の場合は一本どころではない。多分十本くらいは抜けているのではないだろうか。

そんな話を千冬さんにしてみたら、「奴に関して真面目に考えたら負けなんだ」とのこと。それ以来、彼女に関してはあまり考えないようにしている。

「儲かりまっか？」

「いえ、そんなに。如何せんここ、目立ちませんしねえ」

「むー……相変わらずシンくんは面白くないなあ。ここは『ぼちぼちでんな』って言うのが定石でしょ？」

「ぼちぼち程も儲かってないからなんですよ。それに」

「それに？」

「初見様が少なくとも、リピーターのお客様が多いのでそれでいいのです。これも一種のステルスメジャー、ですよ」

*

「んー、やっぱシンくんの煎れるお茶は美味しいね！ まあ箒ちゃんのお茶のほうが美味しいんだけどー！」

「ありがとうございます。以前に箒さんに好評だったお茶を淹れてみました」
「さっすが分かってるうー！」

『さえみどり』を少し箒さんに譲ってみた所、一夏くんからも高評価だったとか。喜んでくれて何よりである。

その姉である束さんも美味しそうに飲んでくれているようで良かった。一方、こちらに来ていないクロエさんは少し不満顔に見える。

「……少し茶葉を渡しますので」

『いえ、私はヒ……マスターの煎れたものを飲みたいのです』

少しだけ表情が明るくなるかと思いきや、直ぐに元の不満顔。やれやれ、やはり子供は難しい。

「……タンブラーでよろしいですか？」

『はいっ！』

普段はポーカーフェイスを心にかけているらしい彼女だが、こういった所は年相応だ。感情の発露がないと子供の発達に悪影響が出ることがあるため、彼女にはもう少し喜怒哀楽を表に出してもらいたいものなのだ。

「それで、人気者の貴女がどうして夜更けにこんな所へ？」

「自分でこんな所って言う辺り、実にシンくんっぽくていいね！　それで、目的だっけ？」

——昔話でも一緒にしようかなあ、つてさ」

▽
▽
▽

思えば、彼は最初から奇妙な人間だった。

私がいくらちーちゃんから彼を遠ざけようと邪魔をしても、いつの間にか現れて、いつの間にかちーちゃんとお話をしている。

気に喰わなかった。あんな男がちーちゃんと仲良くしている所が。

だから何時かは忘れたけど、兎に角人気のないトコで待ち伏せたんだよね。

「ねえねえ、その凡人さん」

「……貴女は確か篠ノ之先輩、でしたか？ 何か御用でしょうか」

「まどろっこしいのは嫌いだから単刀直入に言うよ。……ちーちゃんの前から消えてくれない？ オマエみたいなのが邪魔すると、ちーちゃんが輝けないんだよ。幸せになれないんだよ。だからさ、消えてよ」

あの時の私は、兎に角この凡人を彼女の前から消すことしか考えていなかった。他の有象無象の雑魚なんかどうでもいい、私と篝ちゃんと、ちーちゃんといっくん。この四人で幸せになればそれで良かった。まあ、今でもそれはあんまり変わんないんだけど。

ともかく、もしこれで彼が拒否したなら、多少暴力的な手段を使っても無理やりなんとかしようと思っていた。寧ろ、自分の手で邪魔なやつを消せるのならそっちの方が楽しいだろう、とも。

—— だけどそんな私に対する彼の返答は、酷くあつけないもので。

「はあ。では部長にその旨を説明して参ります」

これだけ。特に狼狽するでもなく、落ち込むわけでも怒るわけでもなく、ただ淡々と変わらぬ、腹が立つほど優しい声音でそれを言つて、とつとと剣道場へと向かつていつてしまった。

もつと違うリアクションを期待していた私も、「あつうん」としか言えずにそれを見送つて。

なんだか分かんないけどラツキーと思つて。

ちーちゃんとの未来図に思いを寄せて。

「あれ、今の剣道部の部長つて……あ」

それに思考を巡らせた瞬間、全てを理解した。

「……あああああんの、クソガキイイイイ!!」

そりやもう焦つた焦つた。

だつて当時の剣道部部长、ちーちゃんだったから。

そして結局少しも追いつくことが出来ずに企みは崩壊、日の下へ晒された。……私、相当全力でトバしたはずだったんだけど。

目の前には鬼。まさに鬼神。……そして、その後ろには汗一つかいていない、ヤツの姿。

「た・ば・ね？」

「ヒイツ」

「何か言いたいことは？」

死刑宣告を前にして。

「なんであんなに素早いんだよ、雑魚の癖に……」

最後に言い残したのは、奴への呪詛だった。

*

「さて、東。説明してもらおうか」

「だから、さつきから言ってるじゃん！ 邪魔なんだよコイツ！」

そんな私に向けて、ちーちゃんは青筋を立てたまま笑顔で此方を向いた。こういう時

は本気でヤバイ時のちーちゃんだ。だけど、どれだけ怖くても私は私達の未来の為に張り合うしか無かったのだ。

「ほう……この部で唯一私とほぼ互角に渡り合える平沢が、邪魔だと言いたいのか？」

「そうだよ、邪魔——え？」

今、ちーちゃんは何と言った？

「そうか、そうか」

確か今、ちーちゃんは互角と言った。

アイツが？

あの、凡人が？

「お前はそんなに私の邪魔をしたいみたいだなあ、束え？」

この規格外と、互角と言ったのか？

「おい、どういう事だよ！なんでお前なんか、ちーちゃんと互角なんだツツ！」

「束ツ！」

「いやいや、私は織斑先輩と互角などではありませんよ」

どんなに怒鳴つても、彼は全く動じなかった。ただただ平然と此方を向くだけ。それが余計に気に入らなかつた。

「はあ!? この期に及んで何とほけて……」

「ただ、そう簡単に負けることはないだけなのですから。勝つこと、となると百回に一回出来るかどうか……」

いいですか？ と生意気にも奴は私の前で人差し指を立てた。その少し気取った動作がもつと腹を立たせる。

「そもそも先輩の剣は雑念のない、澄んでいる剣です。

それはまるで静かな海のように。

そのリズムに歪みはなく、淀みはない。

不規則の剣技の中にも規則を見いだせる、真つ直ぐな剣。誰にでも出来ることではありません」

当然、親友を褒められて悪い気はしない。それに奴は嘘を言つてはいないようだつ

た。つまり本気でコイツはちーちゃんを褒め称えていたのだ。ここで少し、機嫌を治した。殺さないで置いてあげようかな、程度には。

「当然だよ。ちーちゃんは天才なんだから」

ねっ、と横を向くとちーちゃんは顔を赤らめて「うるさいっ」の一言。だけど、そんな良くなった機嫌も次の言葉で直ぐに悪くなることになる。

「——そう、天才。だからこそ、私は先輩に対抗出来るのです」

まるで意味が分からなかった。

「相手が天才なら、雑魚が勝てるわけじゃないじゃないか。ちーちゃんなんだぞ？」
「……………人の話を聞く時」

「は？」

「私のような凡人が人の話を聞く時は、話す相手のリズムに合わせて聞くのです。それが出るからこそ、会話のやり取りは上手く噛み合い、繋げる事が出来ます」

「ここで私は、こいつは頭がおかしいのだ、狂っているのだと判断した。いきなり関係

のない話をし始めるなんて、私じゃあるまいし。

だけど私は優しいし、何よりちーちゃんの前でこれ以上何かすると殺されそうなので話を促してやる。

「……だから？」

「簡単なことです」

——この時、私はようやく理解した。

「相手のリズムを理解出来れば、会話も剣も変わらないでしょう？ 合わせるだけで良いのですから。つまり私はただ、織斑先輩のリズムに合わせているだけなのですよ」
コイツは狂ったんじゃない、元から狂っていたからこそ、狂っていないように見えるんだ、と。

*

「ホント、キミも大概頭おかしいよね」

そんな話をしてみたけれど、この目の前のマスターくんの反応は薄い。というか冷たい。酷いよね！

「貴女は自分の黒歴史を掘り起こすのが本当に好きですねえ」

「う……いいんだよ、今は今、昔は昔ってねっ！」

「昔も今も良くも悪くも、本当に貴女は変わっていませんよ」

都合の悪いことを一々考えるのは間抜けのやることなんだよね。そうやってウジウジしてるから雑魚はどう足掻いても雑魚にしかなれない。ヒントさえあれば抜け出せそうなそこそこ頭のいい人間もいるっちゃいるけどね。

ま、勿論そんな事は教えませんけど？

教えるのはいつくんやちーちゃん、箒ちゃんみたいな大切な人達。

「あ、そうだ！」

それと。

「そんなにチンタラしてちゃ、何時まで経っても捕まえられないよ、ハンターさんっ」

彼のように自力で凡人の域を抜けた、結構面白い人間だけだ。

「……………」

「じゃあね〜!」

そう言い残してから、黙りこくるシンくんをよそにとつとと退散。ちーちゃんと鉢合わせてもマズいしね。

さーて、帰ったら早速アレの続きだ! 待っててね、箒ちゃん!

「ふ…………ふフ、アハハハハハハハハハハハ!!」

ああ、楽しいなあ！ 世界なんてクソつままないけど、追いかけてやるのは本当に楽しい！

シンくん、ちーちゃん、いつくん、箒ちゃん。

速く捕まえに来ないと……ウサギは寂しくて、死んじゃうんだよ？

▽
▽
▽

彼女が消えた後。

「フ……………クク」

握りこぶしに力を入れながら、もう片方の手で頭を押さえる。そうでもしないと、この感情の行き場が混ざり合ってしまうからだ。

また、逃げられた。

科学と幻想が入り混じった月のウサギとは、いやはや面白いものもあるものだと思

う。幻想ははるか昔、百年以上前に科学に殺された。静かの海でさえも、かぐや姫の諸説さえも、皆科学に殺された。筈だった。

だがしかし、ウサギは生きている。科学により殺されることなく、今、こうして生きているのだ。

……いや、それは恐らく正確ではないだろう。きっとウサギは一度死んだのだ。科学によって、その幻想は消された。

しかしソレは蘇った。「蘇り」は「死からの再生」、そして「死」とは科学によって消滅させられた概念の一つ。つまりウサギは幻想として科学に勝ち、そして取り込んだのだ。それが、彼女なのだろう。

さて。

貴女が科学と幻想に生きるヴァーチュアル・ラビットであれば、私達はそれを追うヴァーチュアル・ハンターだろう。

ウサギを捕まえるためには餌がいる。ならば私が餌となり、あの人が狩人となろう。そして貴女を捕まえてみせる。貴女は私達から逃げ続けてみせる。……そう互いに決めたあの日から、未だに彼女は捕まえていない。

ああ、笑いが込み上げてくる。あんなに迷惑だったのに、いざ帰ってしまふととても寂しくなるのはきつと、口惜しいからなのだろう。そんな悔しさを思い返すと、何故だか笑いが止まらないのだった。

「またのご来店、お待ちしております……天災様」

何処かで、口笛の音がした。

更識 楯無①

I S学園の食堂。

価格が安く、また栄養素のバランスも考えられたメニューを中心に行っているこの食堂。ほぼ全ての生徒が女性であることから、ヘルシーなメニューも非常に多く、生徒だけでなく教師からも大人気のスポットである。

そんな食堂の隅には、生徒や教師のごく一部（例外あり）にしか知られていない、静かな喫茶店が存在する。



昼休みや放課後なら兎も角、夜にこの店を訪れる人間は限られている。それは例えば仕事上がりの教師であったり、はたまた女性陣から逃げるために匿ってもらおうと飛び込んでくる男性操縦者であったりが精々だ。……ああ、それと。

「やつほ〜」

「おや、更識さん。いつもお疲れ様です」

「あいあい。何時ものお願いー」

「かしこまりました」

一生徒でありながら、教師と同じレベルの仕事させられているこの生徒会長も、その一人だ。

更識 楯無さん。IS学園の二年生でありながら生徒会長に就任している凄い女性である。一般の高等学校では、春までは三年生が生徒会長を生徒会長並びにその他役職を務めている事が殆どなのだが、基本的にこのIS学園では、生徒会長は学園最強の“生徒”が務めることになっている。つまり、彼女は『現時点で』学園最強の生徒、ということになる。

*

突然だが、マスターという職業には様々なスキルが必要だ。

「ホント、やってらんないわよー……」

「ご苦勞様です」

バーには当然こうして愚痴を吐きにくる方々もご来店される。よって我々マスター

には「聞く」スキルというものが必須になってきているのだ。そしてその「聞く」というものの中には「話を繋ぐこと」も含まれている。お客様に気持ちよく話させてこそ一流のマスターなのだ。その点、ワタシはどうにも話題を盛り上げるのが上手でないのだからまだ二流だ。

「そういえば、ココの客足は伸びたのかしら？ 見た感じ、相変わらず閑古鳥が鳴いてそうだけれど」

「客足が伸びたら伸びたで大変なのですよ。ワタシも流石に三人以上に分身出来るほど器用ではないですからねえ」

「ま、その御蔭で私はこうして愚痴れるしいいんだけど……え？ 三人以上？」

齒に衣着せぬ物言いだが、ワタシは嫌いではない。変に取り繕われるよりもそのままをさらけ出してくれる方が有り難いのだ。

そうこうしている内にお茶の蒸らし時間も良い具合になってきたので淹れ始める。どんなお茶でも……もちろん例外はあるが——一番大事なのは淹れ方とそれまでの過程だ。

基本的に高いお茶程美味しいというのは間違っていない。安いお茶は原材料上、どうしても品質が低くなりがちだからだ。だが、どんなに高いモノを買ったとしても、淹れ方が拙ければその茶葉は無駄遣いになってしまう。

お茶の趣味を始めたい時にまずするべき事は、安いお茶でもいいのでそれぞれお茶にあった淹れ方を勉強することだ。それを完璧にこなせるようになれば、安いモノであってもある程度美味しく飲む事が出来るようになる。逆に言えば、この技術がないと美味しいお茶というものは何時までたつても出来ないのだ。

「お待たせしました。今日は少し銘柄を変えてみました」

「ありがと。これは？」

「福寿園の宇治茶を安く頂いたので、それを」

「……ここのお茶って、妙にブランド物ばかりよね。それにしても凄い安いけど、大丈夫なの？」

「まあ、色々とコネがありますので」

「ふくん？ ちょっと気になるけど、そういうのって聞かないほうがいいんでしょ？」
「そうして頂けると助かります」

情報、コネ。これらはワタシだけではなく我々、つまりマスターという職種についている者殆どが重要視する点だ。安い仕入れコース、取引などなど、上手くそれらを利用しなければ今日の厳しい社会では生き残ることが出来ないのである。

故に決してそれらが外に漏れてはならない。同じマスターであっても仲間ではなくライバル、もしも情報が漏れてしまえば他のマスターにすぐさま付け込まれるだろう。

それもこんな辺境で細々とカフェを開いているワタシだ、都会の人気店の人間にバレてしまえばもうマスター人生の終わりだろう。

……と、そんなことはどうでもいい。今すべき事は彼女の愚痴を聞くことだ。

「第一、なんで私の所ばつかに仕事来るのよ!? 偶に教師の仕事まで持つてくる人もいるのよ!」

「教師の仕事、までですか? それは宜しくありませんねえ」

「でしょう? しかも言うに事欠いて『貴女なら出来るんだからいいでしょ?』よ! 自分の仕事サボりたいだけの癖に」

中々エグイ話題が早速出てきているが、勿論コレを他のお客様に話すことは決してない。……他のお客様には。

「ホント、私がいなくなったらあの人どうするつもりなのかし——あつ」

と、榎無さんが何かを思い出したかのように声を出した。

「そういえば——」



女子という生き物はとかく噂というものが好きで、あることないこと様々を噂として話題に取り上げ、盛り上げる。そしてその中に「IS学園には教員しかしない幻の店が存在する」なんてものもある。

当時の私はロシアの国家代表と生徒会長就任、暗部の仕事の三つに挟まれてんやわんやしていたからそういった話題に参加したことは無かったけれど、まあ大体が創作でしょうね。などと考えながら彼女たちの会話を小耳に挟んでいた。

その喫茶店を知ったのは本当にちよつとした偶然だった。偶には食堂でご飯を、という気紛れで適当な席——人が賑わっていたから隅の方に座って静かに昼食を取っていた時に、目の隅に壁とは少し違う色が混じっていたのが分かった。

近づいてみればそれは扉の取っ手の色で、少なくともこの先に何か別のフロアがある事も理解した。

生徒会長を務める以上、学園の全てを把握しておかなければならない。そんな使命感——などなく、ただちよつとした好奇心から扉を引いてみた。

「本当にあつたのね……」

そこには小ぢんまりとしたスペースがあり、テーブルが二つ、そしてカウンター席が幾つか並んだ喫茶店になっていた。あの噂は本当だったのね……。

「いらつしやいませ」

がらんとしたそのお店を見渡していると、奥から男性が出てきた。ウソ、本当にいたよ……！

「こんにちは。こんな所にお店なんかあったのね。何時からあったのかしら？」

「そうですね……二年くらい前でしようか？」

ということとは私は一年間、この店を見つけられなかったのだ。

少し悔しい思いをしたままカウンター席に座った。

「何かメニューはあるのかしら？」

「はい。こちらをどうぞ」

そう言つて渡されたメニューから、サンドイッチとコーヒーのセットを頼んだ。一礼をしてメニューを片付け、水を沸かしだすマスター。折角なので色々聞いてみることにした。

「ねえ、どうして貴方はこんな目立たない場所で店を開いてるの？」

マスターはふむ、と顎に手をやったあと、まず……と口を開いた。

「単純に、ワタシ一人だと回転が間に合わないのですよ。この学園という事情上、中々人

を雇うのも骨が折れるものでして。回転が間に合わないもう一つの理由は察して頂けると」

困った顔で笑われた。まあ、こんな女の園に男性が開くカフェなんかがあればそりや繁盛するだろう。

「確かにそうね。大きなイベントでもない限り、関係者以外立ち入り禁止だし」

「……というのが、建前の理由です」

「建前？ 今のが」

建前、ということとは他に理由があるのだろう。面白そうなので本音も聞いてみた。

「ワタシはどうにも目立つ事が好きではないのです。ですがこの学園であからさまに店を開くと目立たない、なんてことは不可能でしょう？」

店をやっている癖に目立つのが嫌いというのはどうにもおかしな気がするけど、女子校で開けっぴろげに店を広げたくない気持ちは理解出来る気がした。

「まず無理よね。女尊男卑の思想を持つてる子も勿論いるけど、やっぱりこの年頃だと他の男性が気になるこの方が多いもの」

「ええ。なのでああして少し細工を試みたのです」

成る程、たしかに扉の色は壁の色とほぼ同じで、余程の注意がないと分からないくらいのものであった。しかし、やはりこの疑問はついてまわる。

「だけど、扉を開いたらそれを見た子達にも見つかるんじゃない？」

「というか、何故今までこれが見つかってないのかが不思議でならないんだけど。しかもマスターは困った顔一つせず、ただニコニコと微笑むばかりだ。」

「そこが細工のしどころなのですよ。フフ」

「……コレ以上は教えてくれそうになさそうなので追求はしない。」

差し出されたお茶を飲みながら、気づけば私はマスターに愚痴の限りを尽くしていた。……暗部失格ね。……ただ、

周りの環境。家族との確執。いろんなことを喋っていた。……暗部失格ね。……ただ、心は疲れ切っていたのだ。

「ねえ。……私、大丈夫なのかしら」

そんな中で思わず漏れた弱音。

「詳しくは判りませんが……貴女がとて——生徒会長とはまた別の——重い職務を背負っていることは知っております」

「えっ? ……ッ!」

突然出てきたその言葉に弱い自分は引つ込み、いつもの——生徒会長の、そして暗部としての自分を引き出した。そしてそのまま警戒をする。

「貴方、まさか私の事を調べたの?」

「いいえ。私は無闇に個人情報を探べたりは致しません」

「だったらどうして!」

警戒をしながら出来るだけ情報を引き出そうと動揺する素振りを見せる。だけど彼の口から出てきたのは、自分には理解できない理論だった。

「人の意志というものはまず瞳に宿るものなのです。余程感情を隠すのが上手い人でないとそれを誤魔化すことは出来ません。そして、貴女の普段の振る舞いこそ飄々としていますが、その瞳はいつでも真剣であり、固い。それは人間が重大な覚悟をしている時の瞳なのです。誰にでも宿せるようなものではない」

「瞳……?」

「ええ、瞳です。目は口程にモノを言う、なんて諺がありますがとんでもない。目程モノを言う、意志を表している器官をワタシは知りません」

だから貴女の演技に気づかないハズもないのです、と笑ってこの人は言う。その笑顔に悪意は見えず、ただただ余裕だけが感じられた。

気に喰わなかった。

「……で、ソレを知ってどうするの?」

知って、だからどうするのだろう。

あの子達みたいに拒絶するのだろうか。もしくはあの人達みたいに媚びだすのだろうか。

「故にワタシは貴女を讃えましょう。誰もが最早当然だと思い気にもしていない、その行動を」

それは、諦めきっていた私のココロを留めるのには充分すぎるほどの効果を持ったもので。

「え?」

思わず声を漏らしてしまう自分がいた。

「誰もがそれを認識している筈。しかしそれでも気づけない人間がいる。

灯台は足を照らせず、人間は首を動かさねば下を、周りを見ることが出来ない。

故に意識は流れ、廻り、分かれる。首の向く方向が異なれば、意識の向かう方向も異

なる。

それはまるで山を下り流れ続ける水のように。

——そう、貴女は水脈。

幾多に分岐するその流れは静かであり、且つ騒々と叫んでいる。

分岐はいくつにも分かれ、だがしかし最後には二つになります。

気づく人間、気づかない人間。

気づく者はいずれ貴女を護ってくれるでしょう。何故なら貴女は強く、しかし繊細で脆いことから。

気づかない者はいずれ悔いるでしょう。「なぜ気づけなかつたのか」と。いなくなつてから初めてその重大さに気づくのです。しかし覆水は盆に返りません。

ワタシは彼らに言いましょう。アナタは分岐を間違えたのだと」

私が、水脈？

水？

混乱する私を他所に、マスターの話はどんどんと進んでいく。

さつきまでの怒りは、何処かへと消えていた。

「更識楯無さん。貴女は水脈であり、つまり流水です。

良いですか？ 確かに水は留まれば澱んでしまいます。しかし急すぎる流れは周りだけでなく自分自身をも砕いてしまう。

水のあるべき姿は飄々として掴まらず、且つ時に止まるモノ。

貴女はもつとゆつくりでいい。気を抜いていいのです。

もし気を抜ける場所がないのなら……このナース・カフェをその居場所にしてください」

口を出せる雰囲気は消え去り、最後には笑顔が現れた。

黙ることしか、出来なかった。

意味がわからなかった、からじゃない。

偉そうに、などと腹が立ったからでもない。

ただ、少し嬉しかったのだ。

私のことをこんなに考えてくれた大人は、両親以外にいたのだろうか？ 私に「止まれ」

などと言うヒトを、私は片手で数えられる程しか知らない。

教師は身近にいた。だけど彼女たちは何時でも「頑張れ」「やれば出来る」と背中を押すことしかしてくれなかったから。

親戚の人間は媚を売ってくる人間か敵視してくる人間ばかり。誰も彼も、私を「次期当主」「楯無」という建前だけでしか見てこなかったのだ。

私を「私」として気遣ってくれた人は父さんと母さん、そして布仏の人達だけ。だった。

そしてそんな父さん達とも今では余り会えることはなく。だからこそ私はより”楯無”であるようにいられるように必死に頑張った。頑張って頑張って……いつの間にか、止まれなくなっていた。

ただどこにも、私を止めてくれる大人が現れてくれた。私が私でいられるような人が。

見知らぬ人間の筈なのに——それこそ、今日初めて会ったような、そんな人に救われた。

こんな少しの言葉で——意味は分からないのに——心が洗われたように清々しいの

は何故だろう。

なんて私は恵まれているのだろう。こんな小娘を、どうして皆救つてくれるのだろう。だけれどやっぱり嬉しくて、でもついつい恥ずかしくなってきた。だから。

「マスターさん、ありがとう」

小さな声でお礼を一つ。面と向かつて言うのは恥ずかしいから後ろを向いて。

とても晴れやかな気分になった。明日からまた、頑張れそうだ。もし頑張れそうになくなった時は……また、ここに来るとしよう。

「そろそろ授業が始まるから行くわね。それじゃ、またね」

扉を開いて手を振ると、笑顔で返された。

「またのご来店、お待ちしております」

「ええ、また来るわ」

——扉を閉める直前。

後ろで「どういたしました」という、優しい声が聞こえた。……かなわないなあ。

*

「いやー、懐かしいわねえ」

「時の流れというものは速いものですねえ」

「あはははは、オジサンみたい！」

織斑先生よりも年下という事だけは分かっているため、この言葉はとても失礼（主に先生にとって）なのだけど、マスターはそれを気にもせず笑うばかり。

「ワタシは生徒の皆さんからすればもうおじさんでしょう」

そんな他愛のない話や昔話をしながらお茶を飲む一時は落ち着く。けれどこの会話の目的はただ落ち着くためじゃない。

「マスター、それ織斑先生の前で言っちゃ駄目よ？」

「まさか！ 自殺行為など出来るわけがないではないですか。全く、貴女も中々お人が悪い」

マスターの困り顔、というか苦笑を見るのが最近の楽しみの一つなのだ。ここを訪れたときはなるべく一回は苦笑が見られるように工夫しながら喋っている。そうしないと彼は見せてくれないから。

「しかも最近また言葉遣いが上手になりましたねえ。お陰でますます掴みどころが無くなってしまいました」

大仰にため息をつくマスター。勿論彼も私もおふざけ半分で、マスターのため息だって演技だ。

「ふふふ。だって私は水なんですよ？」

そう言つて笑つてやる。

だけど、今度は演技ではなく本心から。

アナタが水だと言つてくれたから。

そう。

ただ誰かに認めてもらえるだけで、心はこんなに軽くなるのだとあの時、私は知った。元々妹さえ……簪ちゃんさえ守れば、私がどうなるうともいいのだ。彼女が平穩に暮らせること、ただそれさえ叶えば私は幸せだ。

それでもやつぱり、辛いものは辛い。簪ちゃんの為とは言え、やつぱりあの子に嫌われたり無視されたりするのは——堪える。生徒会長の仕事だつて多いししんどいし、ロシア国家代表を背負っている以上日々の練習だつて欠かせない。

「ただどこには、”私”を見てくれている大人がいる。”刀奈”ではなく、”楯無”でもなく、全てひつくるめた『私』そのものを見てくれる、そんな人。

恋愛感情——とはきつと違う。小説やドラマなんかで描かれるドキドキなど、彼には抱かない。

姉であり、生徒会長であり、そして”楯無”である私が唯一この学園で甘えられる場所。甘えられる人。

それがきつとマスターなのだ。言うなれば……お兄さん、だろうか。

「ご馳走様。それじゃまた」

「またのご来店、お待ちしております」

店を出たあと、ふと想像してみた。

物腰が柔らかく、また知識が豊富でありそれでいて強い。話す人話す人に勇気を与えてくれる言葉。そしてとても温かい味がする料理の腕前を持つ、そんな兄がいたら。

「……うーん」

ブラコンになる未来が簡単に見えてしまった。今からもしあの人が兄になったとしたら……私も簪ちゃんも——あの子も大概チョロいから——ベツタリだろう。それくらい、マスターの包容力というものは凄まじい。

だけどそんなIfなんて想像するだけ無駄だ。彼は私の兄にはなり得ない。だからこそ姉である私がしつかりしなければいけない。そうしなければ、色んな人に迷惑がかかる。織斑一夏君や篠ノ之箒ちゃんの事もあるし、まだまだ気を抜くことは出来ない。

だけど、あそこならきつと気を抜ける。

足取りは軽く、鼻歌を添えて。そんな楽しい気分で行ける、そんな場所。

今日も行こうかしら——ナース・カフエ。

織斑 一夏②

雨上がりの I S 学園。

その近くにある林で、佇んでいる黒い外套の男が一人。

男は黄金の月を見上げていた。

月の光が草の露に反射して、辺り一帯、幾万もの月が上っている。

幻想的な光景。だがしかし、彼はそれらに見向きもせず、ただ本物の月だけを見上げるだけだった。

「始まりましたか」

一人呟く声は少し強く吹いている風と木々の喧騒によりかき消され、消える。

「全く、憎らしいくらいに輝く月だ。さぞ兎も嘲笑っているに違いない」

月から目を逸らし自嘲するような笑みを浮かべた男は上着を翻しながら、光る月々から背を向けて歩き出した。

熱帯夜の夜、額に汗すら浮かばせていない彼は地面の水たまりに浮かぶ月を見つけるとフツと微笑み——静かにそれを踏み消した。

「……しかし、思い通りにはさせません。露が月を浮かべるのなら、太陽もまた露の中で光り輝く事が出来るのだから」



気がつくと、波打ち際に立っていた。さつきまで立っていたあの人の姿はどこにもなく、ただ砂浜に一人。ふと空を見てみると、そこには黄金色をした綺麗な月があった。もしも夢なら届いたりするのだろうか。

視線を少し下げれば広い海。海面にはユラユラと揺れる月が一つ、空と同じ色をさせ

ながら輝いていた。

幻想的な光景に目を奪われていると、何か近づいてくる気配がした。その方向に振り向くと……一人の、白い甲冑を着た騎士のような格好をした人がいた。

『力を——求めますか?』

女性なのだろうか。その声は高く、この砂浜に響いていた。それが一体誰なのかは分からない。だけど、嫌な感じはしなかった。それどころか、こちらを包んでくれているような、そんな気さえしてくる。

「ああ。そりゃ欲しいさ」

『人は何時でも力を求めます。貴方はどうして力を求めるのですか?』

その声はどこか泣きそうで、だけれど厳しい——そんな声だった。

『力は争いを呼び、傲慢を呼び、混乱を呼ぶものへと簡単に変わってしまう。力を得た者はそれに驕り高ぶり、力なき弱者を踏み潰す。それはまた新たな闘争の歴史へと変わる。』

それなのに、何故?』

声のトーンは変わらない。ひたすらその人は力の持つ悲しみを語っていた。

俺はその問いに、少し考える。

昔の俺はどう考えていただろう? 今の俺はどう考えているんだろう?

あの人は、どう考えているんだろう。そう考えてみたけれど、どうにも俺にはまだあの人を理解出来そうにない。

だから俺は、俺でいよう。今の俺の持つ答えは。

「俺自身が正しくあるため。俺はずっと『他の人を助けるため』とか言つて、自分から目を背けてきた。そこから起きるまた他の人への危険とも。……だけど、それじゃ駄目だつてあの人に教えてもらつたから。助けたいという想いだけでも、単なる力だけでもきつと足りない。だからまず自分と向き合つて、俺自身が俺のために強くなるくちやいけないんだ。

ソレが例え例え泥臭い生き方でも良い。綺麗じゃないと言われても良い。

まず、自分が”自分”としていられるような——”それでも”と言い続けられる、そんな意志。そんな力が、欲しいんだ」

そして、これだけじゃない。

「さつき貴方は言つた。『力は傲慢を生んで、混乱を生んで、争いを生む』つて。だけど、きつとそれだけじゃないだろ？」

『?』

「確かに力が在る事はきつと、色んな人を調子に乗らせてしまうんだと思う。俺だつて、

あの筈だつてそうだった。だけど、それでも！ 力がある事で、俺は色んな人を護ることが出来るようになると思うんだ。力は包むことが出来る。護ることが出来る。信じることが出来る。……そりゃ、俺にはまだまだ足りないものがある、それは分かっているさ。けど……でも今、力がなときつとより多くの人達の悲しみを生んでしまふ。

だから……皆がその先で笑えるように。花を咲かせられるように。俺は、強くなりた
い」

『……貴方の言つたその先には、きつと多くの苦難が待ち受けていることでしょう。時には傷つき、悲しみ、そして絶望することもあるかもしれない。それでも、行くのですか？』

つい前に教えてもらつた事。今はもう、迷わない。

「ああ。”それでも”」

『ならば——ええ。行きましょう』

「……ええ？」

騎士

光が、溢れていく。砂浜も、海も、空も、そして月も、全て、全て光になつて。

そんな中で、あの騎士が笑っているような気がして。

光が広がって、消えて。そして——目を覚ました。

あんなに痛かった傷は何故か綺麗サツパリ姿を消している。

それだけじゃない。とても、とても身体が軽い気がする。まるで全身が生まれ変わったみたいだ。

今なら大丈夫だ。

「行くぞ……」

『いいですか、一夏君』

何時だったかは忘れたけど、前にマスターはあんなことを言っていたような気がする。あの時もまるで意味がわからないまま受け取ってしまったけど、今なら少しだけ、理解できたような気がする。

生まれ変わるといえるのは何も肉体とか魂とかそれだけじゃなくて、きつと心にも『生まれ変わる』っていう概念は存在するんだ。

ちよつと前の俺とはまるで違う心持ちでいられる。落ち着いていられる。

一時のものかもしれないけれど。

それでもいい。今この瞬間だけでもいい。生まれ変わった自分でいられるように。

『ロータスは輪廻転生——再生の象徴。ソレが咲いた時』

「白式イツ!!」

『キミはきつと、生まれ変わる』

▽
▽
▽

「ワタシが夢の中に？」

「はい。マスター、俺の夢の中でこう言ってたんです」

『泥臭くありません。キミは蓮を咲かせ続けねばならない。それは象徴として。希望として。』

これから先、貴方には無数の試練がある。

それは辛く、時に苦しく痛く。折れそうになることもあるでしょう。

綺麗事ではきつと解決しないことだつて出てくるでしょう。

パラレルに行く船団は何時でもワタシ達を運んでくれますが、今はまだその時ではない。人間には生きるべき時と死ぬべき時が存在し、今の貴方は生きるべき時なのです。

だから、今はまだ眠りの時ではない。目覚めるのです』

「だけど、俺は……俺の機体も……」

『——ワタシが貴方に渡した花。それを強く想いなさい。』

泥に塗れ、汚れ、一度は枯れかけて。それでもその中で優雅に咲き誇る白い花をイメージしなさい。

その白は貴方の誇り。

貴方の願い。貴方の根幹。

いくら汚れても白が在る限り、決して貴方は折れることがない。

足掻き続けなさい。

「それでも」と言い続けなさい。

そうすればいずれキミは彼女を守ることが出来る——白い騎士ナイツとして。

——さあ、目覚めの時。新たなキミの始まりの日。呼びなさい、『

「つる……つかり」

「——で、その後俺はその白式と会ったんです」

IS学園の食堂の隅にある喫茶店。

お客様である一夏君とカウンター越しに向き合いながらワタシはいつもの様に話を聞いていたのだが……今回もとても興味深い内容であった。

「……ふうむ。我ながら言うのも何ですが、如何にもワタシが喋りそうな言葉ですねえ。」

一夏くんは中々ワタシの事を分かっているようだ」

というか、ほぼワタシであった。夢の中でまでこんな説教を喰らえば少しはウンザリするものだと思うのだが、しつかり覚えていて且つウンザリしていない一夏君は本当に広い心を持っている。

「ええ!!? いやまあ、手伝いとかしてますし色々匿って貰ってるので少しは……えーと、なんか、すみません?」

「いえいえ、責めてはいませんよ。寧ろ褒めていられるのです詳しい状況は判りませんし聞くつもりありません。寧ろ、いづれ言うつもりだったので丁度良かった」

「え?」

「いえ、こちらの話です。……………それより一夏君、臨海学校で何か思い出は作れましたか?」

「うえ!!? つ、ゲホツゲホツ」

素つ頓狂な声を上げたかと思うと、お茶が器官に入ったのだろう——激しくむせ始めた。

少しいつもと様子が違うようだったので軽く突っ込んでみただけなのだが、これは予想以上の反応であった。もしかすると『歩く朴念仁』等という渾名をつけられている彼にも遂に進展が来たのかもしれない。勿論そういつた恋愛事というのは個人の自由だ

が、なんとなくこの機会を逃すと一夏君の色恋事情にコレ以上の発展が見込めないような気がした。

子供の発育にとって最も大事なものは、主に母親からの愛情だと言われている。生まれる前にはもう胎内で母親の声を聞いており、また幼少期に一番多く顔を見る機会が多いのもまた母親である。その為、健全な精神の発達には深く“親”の存在が関わってくるのだ。

しかし一夏君達の両親は彼の幼少期に消えてしまったと千冬さんは言っていた。そうなると無論、彼の精神発達にも問題が発生する可能性が高くなってくる。彼が他人からの恋慕を殆ど唯の好意としか受け取れないのは、そこら辺に理由があるのではないかと私は考えているのである。そんな一夏君に今最も必要なのは母性と愛情ではないだろうか？ 家族としての愛情なら彼女が与えられるだろうが、いざ母性となると性格的に難しいものがある。そして今、彼はもしかするとその母性や愛情を持った女性を認識した可能性がある。

よつて、ここは少し深く首を突っ込んで無理にでも意識をさせてやることにした。

「……ほほう？」

「いや、いきなりそれは卑怯ですよマスター！」

「こういう年齢になると若者の色恋沙汰にも興味が湧くものでして」

「こういう年齢って……マスターって千冬姉より」

「いけません一夏君ツ!!」

「つとあぶねえ! えーつと……まだまだ若いじゃないすか」

思わず声を荒げてしまった。

年齢の話に女性を絡めるのはタブーだと言うが、これが千冬さんになると更に危険度が上がる。一度言い切ってしまうえばもう地獄行き待ったなしである。あの人は一体全体どういう聴力をしているのか、今度調べさせてもらいたいものだ。

少し顔を赤らめたまま出ていった彼を見送った後、一息つくくとビールのグラスを用意した。恐らく……来るだろうから。

噂をすれば何とやら——ゆっくりと開かれた扉の先には、先程話題にも出た女性が俯いて立っていた。

「いらっしゃいませ」

「……………」

その人は何も言わずカウンターに座ると突っ伏した。ああ、今日はかなり酷く落ち込んでいるようだ。こういう時はとっとと貸切にするに限る。

お絞りと冷たい麦茶を出した後、カフェの扉の鍵を締めた。この部屋は防音なので、ここの声が外に漏れることもない。

「私の判断はIS学園の教師としては合格だったのかもしれない。だが……一人の教育者として、そして姉としては最早、そう名乗る資格がないのだろうな」

その顔は何うことが出来ないが、声音で分かる。酷く憔悴しているようだった。この人の中には今、様々は感情が唸りを上げて暴れまわっているのだろう。

怒り。悲しみ。後悔。苦しみ。自嘲。それら全てがぐちゃぐちゃになって、彼女の目を暗く閉ざしている。

——救わなければならない。彼女もまだ、若い。荒むべき時ではないから。

「私は……どうすればいい？ 私はあいつらに何をしてやれるんだ……」

迷っている。行先をまた、彼と同じように探しているのだ。放っておけば時間が解決してくれるだろうが、ここに來られた以上、放っておく訳にはいかないだろう。

「あの子達は貴女に憧れを抱いています。」世界最強のイメージというものは早々取れるものではないですからねえ。だから難しく考えず、まずは彼らの前では強く凛々し

くあれば良いのではないのでしょうか。子供たちはひたすら前を見て歩けます。その先に貴女がいる限り、挫折することはきつとないでしょう」

どんなに目の前の人が苦しんでも私は、ワタシは何時もと同じように在らねばならない。それは私がワタシとして生きるために決めた掟だから。分け隔てなく、そして迷いなく。少しでも手助けになるように、導くのがワタシの、マスターの仕事だからだ。「ですが、ずっと気を張っていては貴女がいずれ潰れてしまう。疲れや愚痴が溜まればまた何時でもお越し下さい」

「……すまない」

「いえいえ、ここはそういう場所ですから」

——今日は寝るのが遅くなりそうだ。

クラリツサ・ハルフォーフ①

IS学園の食堂。

夏休みになると流石に客足も少なくなってくる。その隅の隅。

そこには知る人ぞ知る小さな喫茶店が隠れている。

——ただし、本日は閉店のようだが。



マスターという職業に必要なスキルには料理やコーヒー、紅茶を淹れる腕に仕入れ時の値切りの腕は勿論として他にも様々なものが存在する。その中の一つには『受け入れる感性を増やす』というものもあるのだ。

IS学園に限らず、この世界には様々な性格の人間が存在する。そしてその一人一人が違う意志を持つ存在である以上、どうしても人間の好き嫌いという概念は欠かせないと言えるだろう。それは我々人間が人間で在るために必要不可欠な要素であり、且つ人

間が如何に面倒な存在かをも表すものである。

当然、私にも人間の好き嫌いというものは存在する。このような人は好ましいしあのような人は好きではない……と話す中でその人を自分の好き、若しくは嫌いのスペースに位置づけている。

だが、それはプライベートでの『私』である。仮にも接客業を生業にしている以上、『ワタシ』である時にその好き嫌いを表に出すのは論外だ。しかしいくら我々が仕事とそうでない時でオンオフが切り替えられると言えども限度がある。嫌いなものは嫌いだし、気に入らないものは気に入らないことに変わりはないからだ。

そこで我々マスターは様々な場所に赴き、色々な人々を観察し……その在り方を知るのである。得る知識に無駄なものなどなく、人を知り世を知ることが愚かな賢者であるためには必要な事であるからして。

「むっ？ 貴方は……！ すまない！」

それらを見ながら街を練り歩いていると、何処からか声を掛けられた。

「そうです！ 貴方は確か美術館で出会った方だ！」

振り向けば右目に眼帯をした女性。ここ最近でそのようなものをつけているのはポーデヴィツヒさんだけなのでそうでないとすると中々に思い浮かばない。

しかも美術館とは。

「ワタシですか？　美術館となると……ワタシが行ったのは相当前の話ですので人間違いなのでは？」

「いいえ、貴方で間違いありません。記憶力には自信があるのです」

さて、あちらはワタシの事を覚えていようだ。それでは私も思い出すしかない。様々なお客様——最もあの学園でよくご来店頂くのは、非常に限られた方々なのだが——が出入りする店で働くのだからワタシも記憶力には少しばかりの自信がある。

先程は反射的に人違いではと言ってみたがそうでないとすれば、そう……美術館……！！　いや、確かに美術館とも言えるだろうか。博物館との区別が怪しいところではあるが。

「ああ！　貴女はそう、確か京都の……」

「そうです！　覚えていてくれたのですね！」

それにしても彼女に限らず、外国の方々に日本語の発音はとてもむずかしいと言われている中で完璧にそれを使いこなしているのには日々驚きだ。あの月の兎、機械に死の概念を植え付けた元凶の影響はここまで大きかったのかということを改めて実感させられる。

「知らぬふりをされたかと思いました。もしあのまま無視され続けたのであれば——」
「あれば？」

「近くの美術館に火をつけていたかもしれない」

そして唐突な爆弾発言。

「……ああ」

今、完璧に彼女の事を思い出した。彼女——クラリツサ・ハルフオーフさんは京都のアニメイション・ミュージアムで出会った……とても個性的な女性だ。



クラリツサ・ハルフオーフさん。彼女の事を調べてみれば彼女の情報は直ぐに出てきた。なんでも国家的にもかなり有名なISの操縦者であるとか。少し詳しく巣をくぐると、どうやら彼女のファンクラブなぞもあるようで、その人気は中々に高いようだ。

だがしかしその一面に興味がなく、私がいかに見て、聞いて、感じたものしか信じない——時にはそれすら信じない事もある我ながら捻れた性格をしているワタシにとって、彼女はただの少女漫画……ならびに誤った日本文化オタクであると言わざるを得ない。

「日本の女子の髪には芋けんぴがついているものだと思っていたのに……」と本気で

落ち込んでいるその姿を見た時、私は酷く驚愕したのを覚えている。

ISの誕生、そして篠ノ之束の宣言は良くも悪くも外国の女性や政府の面々に日本の文化を研究させる、または正しく知るキツカケにもなっている。その為、現在において海外の女性の日本文化の理解の高さは偶に我々が置いていかれるレベルのものになっているのだ。無論その影響を受けたのか、海外の男性陣も日本語が話せる方々が増えてはいるのだが、こちらについては未だに「サイタマには悪いニンジャを殺すニンジャスレイヤーなる者が存在する」という誤解があったりする。

そんな中、少女漫画でしか学んでいない彼女を発見し色々正しい文化を教え——
—そして、事情を調べて色々納得したのだ。ここまで強い出来事があったのにも関わらず瞬時に思い出せなかったとは、このヒラサワ一生の不覚である。

さて、今。その彼女とは近くのファミレスにて同席している。話題は昔に教えたある伝承について。

「……確かにその通りです。歴史からの発展、いつだって足りないものを補うために造られた筈のソレが、いつの間にか『足りすぎている』」

「そうです。現代人——とは言っても我々が生まれる前の人々からの話ですが、この世は飽和しきっているのです。人間という生物はもう既に満腹であるのにも関わらず、自

らの欲望、人間たちの更なる発展の為にもっと、もっとと色々なモノを創り続けている。さつき仰ったように足りすぎています」

無知は半端な知に優る。半端な知識を持ち、それが一旦固定してしまえばその価値観は中々壊れることがなくなってしまう。

しかし彼女、そしてラウラ・ボーデヴィツヒさんはそれが無い。植え付けられたもの、教えられたもの以外の事を知らなかった。だからこそクラリツサさんは少女漫画からそれを学ぼうとしたのだろう。彼女よりも小さいラウラさんの為に。

だが、少女漫画は所詮創作であり、現実にもそのような都合のいいことなどはそうそう訪れるものではない。少女の髪に芋けんぴがついている確率は恐らく宝くじ一枚で一等賞を当てる確率くらい低いだろうし、ましてや人の頬に自分のSNSアカウントを示すコードを書ける男性などもはやゼロであろう。

そうやって彼女は間違った知識を得た。しかしそれは固まりきっていなかった。

何故ならば、人間個人の価値観というのは周りとの触れ合い、コミュニケーションの中で剥がれたりより強固になったりすることがあり得るからであり、また彼女が賢い人間であるからでもある。

自らの価値観を持ちながら、それをより柔軟に、より正しくあろうと変化させられる人間は少ない。親、そして義務教育という名のマニュアルの植え付けに、更にガチガチ

に固まった価値観に囲われた世の中で育っている子供がどれだけ正しくあろうと思えるだろうか？ 線が既に書かれ、更に色の指定までされている塗り絵に溺れると、一からの想像は難くなる。

テレビという綺麗な額を指差して、「子供が泣いているね」という。無感動、無関心。憐れむ事もなく同情さえしない。あるのはただ「泣いている」という事実を言っているだけ。その映像は彼ら彼女らにとってはただの絵に過ぎない。そういう風に育ってしまつたのである。

その点、彼女たちの価値観というのは言わば「大部分が白紙のキャンバス」なのである。あちらでの教育によりある程度キャンバスは塗られているが、だがしかし人生を生きていく上で無駄になる知識や価値観については真っ白。そのムダ知識に人生が彩られていく上で無駄になると、彼女達の未来にはまだまだ無限の可能性が秘められているとも言えるし、ちよつとしたことで全て台無しになつてしまう危険さもあると言える。だからまずは誰かが下書きを書かねばならないだろう。

ワタシは2Hの鉛筆。彼女たちのキャンバスに書き込めはするものの、それは彼女——いや彼女だけではない。一夏くんや鈴音さん達、恐らく色々な人間の心のキャンバスに書き込めることだろう。だが、それは直ぐに消すことが出来る。ワタシの語りはとどのつまりワタシの価値観の押し付けであるが故に。

「そのような飽和した世の中、それを一部でも薄くしようと考えた『百足らず様』。江戸時代の庶民、旅人を足らず為に励んだ『楽足り屋』……。素晴らしいですね」

「ええ。我々が長らく忘れていた……。というよりは、正しく認識をしていなかったとしても言うべきなのでしょうが。ともかくその『百足らず様』によってワタシは現在の歪んだ在り方、錯覚から抜け出せたのであります」

「私も認識を改めないといけないかもしれませんが。機械もISも便利な代物ですが、物事には何でも欠点がある事を忘れていた事を否定できませんから」

ワタシの下書きは時代の逆行。栄養飽和状態なのに栄養不足だと嘆き、満腹なのに空腹だと不満を感じる……。ましてや、もつと便利な時代にしろなどと喚く愚かです。うもない人間になると、足りすぎを知るが故に強請らず駄々をこねず身の周りの環境を受け入れられる人間になること。どちらが正しいと言えるのか？ と考えると、勿論私は後者である。彼らは負債が次の世代に影響を与えることを失念しているのだ。積もる悪習も負債も、全ては子孫の、孫子の代まで受け継がれている。それは現代も昔も関係なく人間の歴史として証明されている。

『SAY NO!』

本当は誰かがそう言って止めるべきなのだ。各種とりどりの負を次代に押し付ける

事の何が正なのか。

とは言え、ただの一般人であるワタシに出来ることは、真つ白な彼女たちが汚れないようにただ下地を作っておくことだけだ。彼女たちには有象無象のようになってもらいたくはないから。勿論、ワタシのような良くもわからない凡骨になるなど以ての外である。彼ら彼女らは磨けば綺麗に光る原石だ、それを磨かず、導かずして何が大人か、何がマスターか。新しい時代を作るのは何時も少年少女、つまり若者なのである。

自らを戒めているであろうクラリッサさんに語りかける。例え国や文化が違えど、この認識が彼女を通してより多くの人に受け入れられる事を願つて。

「その意識を忘れなければ良いのです。今この世の中が『足りすぎている』と考えている人はあまりにも少ない。であるなら、これから増やしていくしかありません。ですから、貴女の周りでも『百足らず様』について語ってみてください。少しずつ、少しずつ。身の回りからの改革が大切なのです」

「はーい」

「……………ああ、そうそう。クラリッサさん」

……さて、ここで少し釘を刺しておこう。前に聞いた一夏君の話とラウラさんの話からするに、あの例の事件の犯人は彼女だろうから。

「はい？」

「夢を見る事は大切な事です。しかし、流石に現実には少女漫画の勢いを持ち出して来ると彼女は困惑してしまうでしょう。彼女は貴女よりも更に純粹なのですから。彼女を想う気持ちは解りますが、暴走してはいけませんよ？」

「くっ……善処します」

「何故そこで悔しそうになるんですかねえ」

思わず苦笑が漏れた。

これでは果たして釘を刺せているのか、怪しい所だ。……そもそもこれはワタシが前もって予防すべき案件なのだろうか？ 変に刺激を加えてしまうと漫画文化に深い興味を持つ彼女のことだ、『少女漫画がダメならば少年漫画がある、織斑一夏は男性なのだからそこにヒントが……！』などと思いかねない。いや、なんにせよ一長一短であるため間違っているとは言えないのではあるが。

まあ、それにしても。

「確かに先程認識を改めさせられたばかりだ。つまり——」

他人のために悩める人の、どんなに尊いことか。

真剣にどうすればよいかを考えている彼女を見て思わず笑ってしまった。勿論貶すつもりなどない。寧ろ微笑ましいのである。何故ならば……。

そういったものにこそ、人生の美は詰まっているのだから。



『いいですか、隊長？ 私の知人から聞いた話なのですが、ここ（日本）には『百足らず様』というとても——これを——』

「お、おおう……成る程！ 確かに好きな男を獲る為にはまずはこういった世間話から交友を深めればよいと借りた本にも書いてあった！ 実践してみるとしよう」

『御武運を』

「ああ」

「嫁よ」

「ん？ ラウラか。どうしたんだ？」

「偶には世間話でも、と思つてな。それより、こんな話を聞いたことはないか？」

「え？ ——へえ、ここにもそんなものがあつたのか」

「ここにも!? ということは他にもあつたのか!？」

「ああ。ウチの中学にも七不思議つてのがあつてさ——」

「おい、マスター」

「なんでしよう。織斑先生？」

「IS学園の七不思議とやらに新しく『百枚の紙があつたはずなのにいつの間にか九十九枚に減っているのは『百足らず』の仕業だ』……などというものが出ていると噂している学生がいたのだが」

「!?」

正しい『百足らず様』の浸透には程遠いようだ。

シヤルロット・デユノア②

IS学園の食堂。

夏休みも終わりに近づき、少しずつ賑わいが戻ってきたその食堂の隅。

誰も気づかないように巧妙に隠している扉の先には、小さな喫茶店が存在する。

……そして、地下にはとある人物により作られた実験場も。



「マスター、これが……?」

—— 目前にあるソレを見て、思わず疑問の声が出てしまった。

「ええ、そうです」

何の変哲もなくただ首肯するマスターを見るに、嘘はついていないのだろう。この前に試験的に渡された『チューブラ・ヘルツ』だって、始めは訳が分からなかったけれど

使ってみるとこれがまた案外楽しかった。

だが、今回のコレは一体何なんだ。

——砲身の後部、そして恐らく展開時の背中部分に当たる場所に設置されている太陽光パネル。

そして、何よりも。

「え、あの。これIS用ですよね？」

「ええ」

「何ですか、これ？」

「これは太陽光集光並びに収縮発射システム、試験兵器『ソーラ・レイ』です」

「『ソーラ・レイ』……」

とてもISが使えるとは思えないような巨大な砲身。昔フランスで流行っていた日本のロボットアニメーションを想起させるような、それこそISをつけた僕達と同じくらいの大きさだ。

どう見ても、ISが使つて良いような武器じゃなかった。

*

「えっと、威力はどれ位？」

「チャージ量によります」

「最大まで溜めたら？」

「アリーナの障壁を余裕でぶち破れます」

「却下ッ！」

あの障壁自体正攻法じゃまともに壊せないものなのに（今年に入ってから何回か破られてるって聞いたけど）、それが余裕だって？ そんなのはIS用の武器じゃない、ただの質量兵器だ。

そんな僕の困惑や憤りとは裏腹に、マスターはいつものようにニコニコ笑っていた。

「まあ、こう言っただけですが……いざ戦闘という時に最大までエネルギーを溜められる猶予などありません。よって実際の使い所としては数%から十数%まで溜めての発射となるでしょう」

そこからの説明を聞くに、どうやら最大威力はあくまで理論値であり実際に試した訳ではないらしい。それもそうだ、もしこの平気の最大威力の試験なんかやっていたらこ

の実験場がバレルる所の騒ぎではなくなるだろうし、そもそもマスターはISに乗ることが出来ないので使用することは——多分出来ないだろう。

「それじゃあラウラやセシリアの武器のほうが便利じゃないですか?」

「それがそうとも言い切れないのです」

「この『ソーラ・レイ』は基本的に使用エネルギー全てを太陽光パネル式のエネルギー充填板で賄っています。よって、緊急時以外はISのエネルギーを一切使用しないのです」

「余談ですが、実はこの喫茶店や実験場の電気も全て太陽光で補っているのですよ」

「えっ、そうなんですか!?!」

「はい。生活設備の技術がどんどんと発達し人間にとっては便利になっている一方で、電力は未だに有限資源による発電に頼っている現実にワタシは兼ねてから疑問を抱いていました。しかしワタシは非力で無名な凡人、いくら一人で叫ぼうと耳を貸す物好きは滅多にいないでしょう。ですからまずは実績を、ということでごこの校長や色んな方に頼み込みましてねえ。太陽光を電力に変えるシステムを——」

「ああ、ソーラーパネルとかは昔から売ってますよね。ただどあれって高いんじゃない?」

「作らせていただきました」

「自作う!?!」

なんだろう、マスターの話を聞く度にどんどん疑問が増していく。自力で発電システムを作り上げられるこの人は一体何なのだろう。さつき自分は非力で無名だなんだと言っていたが、あんなのは絶対にウソだ。昔から日本人は謙虚さを大事にしていると聞いている。きつとこのマスターは裏では第二のふる里である緑の地球を守っている戦士の為に、研究をしているに違いない。

「マスターですから」

「マスターって一体何なんだろう……」

喫茶店のマスターという言葉を聞くと本来「喫茶店の店主」と連想するのが当然だけれど、最近この人の「マスター」発言は「熟練者」という意味を示しているように思えてならない。紅茶やコーヒーを入れるのがとても上手なのはまさに喫茶店のマスターという感じだけど、武器が作れて機械が修理できたりするのは喫茶店のマスターとして果たして正しいのか。

……だけど、これで。

これで僕だつて遠距離からでも撃てる。アレに頼らなくても、工夫をすれば脅威になれる。

——結局、あの時に僕は殆ど役に立てなかった。

悔しかった。

「ただ、これなら。これなら……！」

「ああ、シャルロットさん」

「っ！ はいっ」

急に話しかけられて慌てて返事をする。ちよつと不自然だったかもしれないけれど、いきなりで驚いたとを考えてくれれば問題はないだろう。大丈夫だ。演技には慣れていくから。

こう考えてしまったのは、まだ自分の内心などバレないだろうと思っていたからだ。

「これは凡人の戯言です。ですので聞き流してもらっても構いません」

「……………」

……この一言を聞くまでは。

そう、他の人ならば大丈夫だった。これで切り抜けられた筈だ。……だけど、やっぱりこの人には敵わないんだなあ。織斑先生もそうだけど、こんな凄い大人たちに囲まれてしまつてはどうにも自信がなくなつてしまう。転校生でまだそこまで付き合いが長くない僕でさえそう思うのだから、僕よりももっと彼らとの距離が近い一夏はもっと大変なんだろうなあ。目標をあんなに遠くに置くのも分かる気がした。

抵抗を諦め、大人しく忠告を聞くことにした。

「人々は皆違つた価値観を持つ、教育者はそう教えます。しかしそれは誤りで、実は人間

の価値観というものは大抵何者かの誘導により同じ方向に向けられているのです。勿論例外は存在し、また影響の強弱にも個人差はありますが……しかし尚その植え付けられた価値観を人々は自発的なものだとは信じている」

必死に頭の中でマスターの言葉を噛み砕く。何時迄も「意味は分からないけど響く」なんて考えていたら成長なんて訪れないから。言葉、本質を理解することで始めて本当のメッセージを受け入れることが出来る。日本語でもフランス語でも変わらない、コミュニケーションというものはそういうものだから。

「価値観の在り方はその言葉の通り『その物体に価値があるのかどうかの考え方』です。例えばISの特機、ソレを持つていない操縦者達は口を揃えて「羨ましい」と言います。若しくは捻くれた者ならば「アレのせいで国を背負わされるのだから可哀想だ」と考えるかもしれません。しかし彼女たちの価値観は違うわけではなく、皆一様に『特機は価値のあるものだ』そう考えている。価値があるから羨ましい、価値があるからその分のプレッシャーを負う。感じ方さえ違えどその特機に向けられる価値の大きさは皆同じである、そう皆が思っている。しかしそれを確かめるすべなどないのです。何故なら思考が全て読み取れる人間など存在せず、また脳の信号を目視できる眼を持つ人間も存在しないからです。そこに人間の思考の根源、クオリアがある」

価値観の在り方。

方向性の誘導。

他人の気持ちなどそうそう分からない。

感情の信号。

クオリア。

詰め込む。詰め込む。脳内に語彙を詰め込んでゆつくりと後で整理する。

だから今は、聞き取る。

「貴女の在り方は何ですか？

貴女の本当の価値観とは？

無意識の中に生まれた本当のクオリア、根深く埋まり、権力者の洗脳から逃れたソレをどうか探してあげてください。

その先には混乱と嘆き、苦悩と葛藤が待っていることでしょう。しかしそれら負の渦の中には貴女の感じる『空洞』を埋めるモノがある。ソレを埋めた時、貴女が本当にしたかったこと、目指したかったことが分かるでしょう」

それでは、頑張ってください。そう言つて静かに一礼したマスターに一言、「ありがとう」とだけ残して店を出た。

焦ることはなかった。目先の負に囚われる所だった。

そう、僕の本質。僕の役割。

そして、本当の望みを見つけない。それにはまだまだ実力も意識も足りないだろうけど、まだ時間はあるんだ。ゆっくりと見つけていこう。

「さて、頑張るぞー！」



シャルロットさんが出ていく数分前から、ある一つの気配が微かに見えた。すぐに消えてしまったのはきっと彼女から隠れておく為だろうと判断し、ワタシもそれを口には出さず、彼女を見送った。さて、そろそろ来るだろう。

予測してジョッキを用意した瞬間、ドアが開かれる音がした。

「いらつしやいませ、織斑先生」

「……お前な」

開口一番、やってきたお客様——千冬さんは録音・再生機器を取り出し、再生ボタンを押した。

『太陽系からサワディークラップ！』

一億四千九百キロの果てより到来する太陽PHOTONの翻訳者として。

はたまた混沌の姉妹、CHAOSの淑女たる突風……或いは高波、さざ波に秘めたる秩序、”回転”より感電を齎す者として諸君は讃えられる。

HUNTERとして行け！ 唯普通に呼吸する地球の行為者として、その足跡そくせきを毒

で汚さぬ太陽系の歩行者として。例え今生で“変人”と呼ばれようとも、宇宙の秩序が諸君の隣人にある限りにおいて———』

「こんなものを色んな所に送りつけておいて、何が“協力”だ馬鹿者。こんな不気味な音声、半ば脅しではないか」

「はて。見覚えがありませんが……」

「阿呆、下手な演技をするな。……まあいい。生」

「畏まりました」

——賢き者は気付く。愚か者は気付かない。非常に簡単なことであり、彼は少なくとも前者である、ただそれだけの事なのだ。

翻訳者、或いは狩る者がいなくなった時、つまりはハンターが消えた時。それは終焉であり、絶望なのだ。何故なら有限には終わりが存在するのだから。

狩る者が消えれば狩られる者は増える。其れが例え有害であろうとも。

故に我らハンターは狩り続け、そして翻訳し続けなければならぬ。更に私の場合は狩る対象が増えてしまっている。この科学に塗れた世界の中で、科学により殺され科学により蘇った賢き月の兎を捕らえねばならない。全く運命というモノはいつも私を振り回す。

「それで、アイツはどんな感じだ?」

千冬さんはよく人名をぼかす。例え兄弟でも友人でも、気が抜けると直ぐに「奴」「あいつ」と呼ぶので誰の事を聞いているのか、言っているのかを判断するのが難しい。何回も注意はしているのだが一向に改善しない所を踏まえるに、最早癖なのだろうと諦めた。

因みに、ココでの「アイツ」とは彼女の事である。

「非常に優秀ですねえ。彼女には一夏くんや篠ノ之さん、或いはセシリアさん達のように特段と秀でている点こそないものの、全体的に能力が纏まっているためにとっても応用が利きます」

「確かにな。座学や実技でも安定した成績を残している」

「はい。よって彼女を評価するならば『万能』という言葉が一番似合うでしょう。しかし」

「悪くいうならば『中途半端』……そう言いたいのだろうか？」

「ええ。彼女の機体とも噛み合っているのでしょう、動きにおいても判断においても合理的で冷静です。ですが、故に爆発力がない」

一夏君達が他に比べて兎に角秀でている点、そこが瞬時に最大限の能力を引き出す『爆発力』だ。彼で言えば勿論『零落白夜』による一撃必殺が売りであるし、セシリアさんは中・遠距離における射撃能力で言えば一年生の専用機持ちでは頭抜けている。箒さんの格闘技術などは上級生相手でも十二分に通用するだろう。

当然その分彼らには明確な弱点が存在しているわけだが、そこを長所で無理やりカバーすることが出来るのが強みでもある。故にハマればとてつもない実力を発揮できるだろう。

だが、彼女——即ちシャロットさんにはそれが無い。威力だけで言えば『盾殺し』なるものが存在しているが、あれは一夏君達よりもさらに限定的な条件下で効力を発揮する武器であり、長所とは言い難い。安定しているからこそ、形勢を無理やりひっくり返すような能力がない。それがシャロットさんの弱点である。

そして、それを彼女自身が理解している。一年生の特機持ちの中でも最も素直で自らを冷静に省みる事が出来るであろう彼女は、夏以降からどうにも焦っているように感じられた。恐らくは例の一件が原因なのであろうが。

「ですが人の得手不得手は決まっております、また進むべき道を歪ませるのはワタシの望む所ではない。なので少し手を加えているのです」

「だからあんな毒沼に突き進ませるような忠告など吐いたのか」

「毒沼とは失礼な。寧ろ目隠しをほどく手伝いをしたのですが」

「反権力主義の権化め」

「物騒なことを仰る。ワタシはただアウトローを気取りたいだけなのですよ」

「ハッ、どうだかな」

教育者、という語彙を使用したのが癪に触つたのだらうか、彼女の今日の当たりはとうにもきついものがある。ワタシに言わせれば、彼女は人々の言う一般の『教育者』というカテゴリには全く当てはまらないので気にしなくて良いと思うのだが。

グラスを磨きながらそんな事を考えていると、ジョッキを置く音が聞こえた。

「……権力主義に真つ向から喧嘩を売った筈が、いつの間にか自分が権力を握る側になった。全く、余りにもやるせない」

「……………」

「速く捕まえねば、いずれアイツは壊れてしまうぞ」

「……難儀ですね。お互いに」

「全くだ」

苦笑し合いながら溜息を吐いた。

洗脳を受けなかったが故に。自らの本質を貫き続けたが為に社会に絶望した哀しい兎。彼女の抵抗すら未だ人間の洗脳を解くには至らず、逆に新しい価値観を受け付けるキツカケを作ってしまった。

その時の彼女の悔しさはどれ位のものであっただろうか。歯車の愚かさに失望し見向きすらしなくなったのも私達には理解できるが故に、早く止めなければならぬ。速く救わなければならない。

だがそれで果たして彼女は治るのか？ 幸せになれるのか？

答えの浮かばない問いとともに、静かな夜は更けていく。

山田真耶①

IS学園の食堂。

新学期が始まり、途端に賑わうようになった生徒たちの憩い場であるその奥隅には他人に気付かせる気が全くないような、目立たない扉。

そしてその先には日常の喧騒から引き剥がされたような静寂が包む、小さな喫茶店が存在する。



「はあ……」

今日もまた、失敗してしまった。

自分が理解しているのと、それを他人に教えるという事は違うと理解したのはIS学園に教員として入って直ぐの時。そこからは、出来るだけ分かり易く噛み砕いて教えられるように精一杯工夫をしてきた。つもりだった。

だけど授業を始めようとするとからかわれるばかり。慣れようとしているのにどう

しても慣れられない自分が嫌になる。

「はあ……」

あんまり、迷惑は掛けたくない。本来、こんなことなんか自分一人でなんとかするべき事なのだろう。きつと織斑先生なら自分でなんとかしているに違いない。あの銀の福音の暴走事件から後、私の目にもハッキリと映るくらいにあの人は落ち込んでいたのに、数日後にはもういつものあの人に戻っていた。自分を戒める事で切り替えたのか、その方法は知らないけれど……凄いなあ、と思う。きつと私も教師として、それを見習わないといけないだろう。

でも、やっぱり辛いものは辛い。胸のモヤモヤがどうにも抱えきれなくなった時。私はいつもあるそこへ向かう。

「こんばんは……」

ゆつくりと扉を開けると、何時も通りのがらんだフロア。そしてカウンターの向こうに一人の男性がいる。

「いらっしやいませ。こんばんは、山田先生」

「この喫茶店のマスターであるヒラサワさんだ。ここにいつの間にか喫茶店を作っていたIS学園でも数少ない男性で、なんと織斑先生の一つ下、後輩にあたる方なのかとか。」

「また中々難しいお顔をされていますが、何かあったのですか?」

「……あの、やっぱり私は教師に向いていないのかなあって。その、前に来た時にもこんな事を言った気がして……すいません」

「いえいえ、構いませんよ。ここは癒しを求める方々の集い場として作られているので……と言っても、集い場と言う割には殆どの方が単独でのご来店になるのですがねえ」
しかし、それはつまり皆様が元気にやれている、ということなので嬉しいものです。
そう言ってニコリと笑った。

「それで、教師に向いているのか、とは一体何があったのか……お聞かせ願えますか?」
「私、ドジだし気が弱いし。生徒の子達も授業中のお喋りをやめてくれないし……。いえ、私が生徒だった時も偶にそういう事があったので彼女たちを責めてるわけじゃないんですけれど。それでも、やっぱり辛いです。話を聞いてくれない時、私は果たして必要なのかなあ、そう思ってしまうと止まらなくなってしまうって……」

「いざ声に出すと自己嫌悪が止まらない。やはり自分なんかダメなんだ。もっと実力

のある者が教師になるべきなのだ、という声が心に囁きかけてくる。それが苦しくて、思わず視線が下へと向いてしまった。

「自分はダメかもしれない……そう考えてしまう、という事でしょうか？」

「はい……」

「ふむ……では一つ、喩え話をしましょう」

そう言つて、マスターはグラスをコトリ、と置いた。

「ある所に、一人の男がいました。裕福でもない貧乏でもない、ただただ平凡な人生を歩んでいる男です。

そんな彼はある時、とある噂を聞きます。なんでも、鉄で出来た山があり、その頂へと至つた者は一生分の幸福が得られるであろう、と」

一生分の幸福。それはとても夢のある話だ。それが得られればどれだけ心が軽くなるだろうか。

「彼は思い至ります。

『そこに登ることができれば、私はこの退屈で停滞した日常から抜け出せる。どうせ人の生など儂いものなのだから、いつそ死ぬ気で登ってしまおう』と」

「それは……」

それはきつと、中々出来ることじゃない覚悟だ。覚悟も自信もない私などと比べるこ

とは出来ないと思うのだけど……。

マスターの話は続く。

「しかし、その山の道中には幾つもの茨が這っており、とても前に進める状態ではありませんでした。更にその茨は山と同じように鉄で出来ており、半端なやり方では切れそうにありません」

「うわあ……」

喩え話である筈なのに、何故かこつちまでウンザリさせられるかのような錯覚を覚える。

「鉄山を登るために鉄の茨を切る者は『そらワツセーラ、エーイー』と気合を入れますがソレだけで闇雲になってもソレは切れることはありませんでした。よつて彼は鉄を切るための技を覚えることにしたのです。

時間をかけ、努力し、技術を高めた。そのお陰で鉄をだんだんと切れるようになってきた。男は思いました。『ああ、これで前に進める。もう少しで私は頂を見ることが出来る』と。

——しかし彼はある時限界を覚えました。いくら身につけた技を使つても、どれだけ目の前の鉄を切つても、目指す山頂ははるか遠かったが故に」

ああ——それは、とても良く分かる。研鑽を積んで代表候補生になれた時、私はとて

も嬉しかった。けどいつからだろう、才能の壁が見えるような気がした。自分なんかでは到底壊せそうにもない壁が。もしかすると、話の中の男性も同じ絶望を味わったのかも知れない。

だからこそ、聞いてみたくなった。

「彼は……」

「はい？」

「その鉄を切る人は、どうなったんですか？諦めてしまったんですか？」

いつかの私のように。

「はい、彼は一度諦めました……しかし、彼がふと空を見上げた時、見たのです。天高く空飛ぶ人を。」

その人は羽を纏っていました。勿論、それは彼が見た幻想だったのかもしれませんが。しかし確かに分かったことがあった。それはその人の顔が酷く明るく、晴れやかだったこと。

そして気づいた。“——ああ、自分が今切るべき鉄は目の前にある鉄ではなく、自分に巣食った『諦め』『絶望』で出来た鉄であるのだ”、と

「自分の中の、鉄？」

「はい。その鉄はワタシ達の身体を重くします。意志を弱くします。今日も死ぬ気で頑

張つてきたのに、いつまで経つても明日……つまり良い未来を迎えられない。その現実が自分の中に鉄を生み出すのです。そしてそれは誰にでも生まれるモノ。大事なものは、その自分の中の鉄を切ることが出来るかどうかなのです」

『諦め』『絶望』の鉄。思わず納得してしまう。私はあの人のようにはなれない、身体能力が違うから。才能がないから。そう思い始めた瞬間から、自分の動きが鈍くなったような気がした。

もう駄目だと思つた時、頭に浮かんだ「自分は才能がないから、負けても仕方がない」という言葉。昔の私がよく考えていたソレは、今まさに私自身を縛る鉄の鎖になつていた。

そして、彼はそんな自分の中の鉄を——鎖を、切れと言う。だけど、どうすれば？

「自らの鎖を引き千切る方法」

「ッ!?!」

まるでこちらの心を読んでいると言わんばかりの言葉に、自分の心中を見透かされたかのような感覚を覚え、思わず身体が震えた。マスターを見ても、にこやかに笑うばかりで何も読み取ることが出来なかつた。この人は一体どこまで私の事を分かっているのだろうか？

「それは単純な方法です。自己を肯定してあげてください」

「自己……自分を、受け入れるっていう事ですか？」

「ええ。まあ、要は捉え方の問題なのです。」

例えば、自分には才能がない」というネガティブな側面を、果たして『自分には才能がない。自分はこのままでなのだ』と考えるのか、それとも『自分には才能がないようだ。ではここからどうやって伸ばそうか』と考えるのか。同じネガティブの受け入れ方でも、心の持ちようはだいぶ違うものです。……ただ、中々にこれが難しい。特に自己肯定感があまりない方なら尚更でしょう。ですからまずは少しずつ、『今日はこれが出来た。今日の自分は頑張った』と、小さなことからでもいいので自分を励ますようにするといかがでしょうか？」

「小さなことから、ですか」

なるほど。少しずつなら、私でもなんとかなるかもしれない。だけれど自分を励ます……なんて、どうやって？

「——あれ？」

そんな時、何故か少し前の出来事を思い出した。

……そう、あれは何時かの昼休み。

『山田先生！ 今日はこちらが聞きたいんですけど……』

『あら、織斑くん。勿論いいですよー！ えつとですね、ここでもし速度をそのままにすると直角に曲がらざるを得ないので、機体や操縦者に凄く負担がかかってしまうんです。ですからこうやって……』

『えーつと……ああ、そういうことか。だからこの軌道に入る瞬間に出力を少し落として……出来たっ！』

『はい、そうです。よく出来ましたね！』

『よし、これで小テストはなんとかなりそうだ。先生、ありがとうございました！』

——そうだ、あの時。私はちゃんと教師をやれていたじゃないか。

たとえ数が少なくても、私にお礼を言ってくれる子達がいる。アドバイスを求めてきてくれる子達がいる。それを喜ばないなんて、それこそ教師失格だ。だから、それを誇

りに思おう。まずは、それから始めよう。

……ああ、そうか——これか！　これが、『自分を励ます』という事なんだ！　なんて胸がスツキリするんだろう。

そうして一人で感慨に浸っていると、

「あつ！　ご、ごめんなさい！」

「いえ、構いませんよ。少し、元気が戻られたようで何よりです。もしも、先程『自分を励ます』事を実践されていたのでしたら、きつとそれは成功しているでしょう。いい調子です」

そう言つて、笑つてくれた。

それはとつても優しい笑みで、なんだかお父さんのようだった。

「はい！　……あの、お話をしてくれてありがとうございました。なんだかとつても胸に響いてきて、感動しちゃいました！」

そして、肩の荷を降ろすのを手伝つてくれた。沢山の感謝を込めて頭を下げる。

だけどもマスターは首を横に降つた。

「いえいえ、そんなことはありません。ワタシは寧ろ、酷く分かりにくく、不親切で憎つたらしい人間なのですよ。でなければ、こんなに回りくどくは言わないでしょう。真の善人であれば、素直に言葉を贈るものです」

そう言うのとマスターはニヤリ、と笑った。

「ですから、ワタシは貴女が期待している程の者ではないのです。ワタシはただの一介のマスター。それ以上でもそれ以下でもありません」

会計を終えてから店を出る間際、もう一度お礼を言おうと振り返る。

「ありがとうございます。私、頑張つて自分の中の鉄を切つてみせますね！」

「はい。しかし一人で自らの鉄を切るというのは中々難しいもの。困ったら誰かの手を借りる。それもまた、鉄を切るための方法の一つであることをお忘れなきよう」

「はいっ！ それではマスター、失礼しますね！」

「ええ、お休みなさいませ」

ありがとうございます、という言葉を背中に店を出た。

もう少し、頑張ろうと思えた。自分の中ですぐ諦めるんじやなくて、考えてみよう。

でも、それでももし辛くなってきたら……また行こう、先生の元へ。



人には向き不向きが存在する。それは人間が脳の感覚や身体の大きさ、性格などの様々な複雑な部分が混ざりあって出来ている以上当然のことだ。

ワタシからすれば山田先生は決して教師に不向きな訳ではない。一競技者としての映像も見せてもらったことがあるが、効率と読みに優れていたいい動きをしており、才能がない……などと言うのは憚られるくらいのものであった。教師としても、寧ろ理解を深めさせてくれるという点では織斑先生など目でないくらいだ。まあ、これは性格の問題もあるので深くは触れないが。

ワタシのような男性がこうして働く際、変に口出しをして生徒を混乱させたり、非常事態において迅速に行動が出来るように講習を受けることになっている。ワタシはその時彼女から講習を受けたのだが、兎に角山田先生は『物事を噛み砕いて教える事』に長けているのである。

ワタシ自身以前からI Sの知識は無いわけではなかった——これは若き知的好奇心の暴走によるものである——のだが、では専門的な内容にも明るいかと聞かれれば決してそんな事は無かった。寧ろ無知の部分のほうに余程多かつたくらいである。そのようなワタシでも理解できるよう、懇切丁寧に解説をくれたのが彼女であった。

彼女による解説の良い所は全ての話に筋道が通っている所である。何をどうすればどうなるか、何故そうなるのか。どうすれば成功率が上がるか。それら全てを数学的理論と脳の動作仕様により綺麗に繋げることが出来るのだ。当然、脳の動作などその状況におけるストレスや感情により変わってくるため、『大勢が想像するような普通の人間』をベースに物事を考える。それらが応用になってくると、理論の組み合わせや個人個人による能力、強いイメージ等個人差のある脳の動作が関係してくる。

つまり、山田先生は『基本を身につけさせる・記憶させる』ような内容を教えるのが非常に上手だと言うことだ。

しかし、これが却って仇となるとも言える。生徒たちの世代は丁度モンド・グロツツの影響を多大に受けて育ってきた世代だ。つまりそれだけレベルの高い戦いを彼女たちは見ているため、いざ自分たちが動かす側になった時、TVの向こう側の世界への憧れにより応用技術への好奇心がとて強いのである。そして初歩的な動作——つまりは基本の理論になってくるとどうしても地味な要素が強いため、華やかな応用技術を早く学びたい彼女らにとっては「地味」「格好悪い」と言ったイメージが強くなってしまう。これが基本への関心が薄い原因である、そうワタシは踏んでいる。

更にその点で言えば織斑先生は応用技術のスペシャリストの一人である。彼女自身

の技量、そして一挙一動に現れる闘気、カリスマがそれらの華やかさを際立たせている。これは今の山田先生では辿り着けぬある種の高みの一つであり、そして多くの人間を魅了する一面でもあるのだ。生徒たちが応用ばかりに目が行くのも幾らか仕方のないことであろう。

——では、基本を放つておいてもいいのか？

答えは否だ。そもそも応用技術というのは、基本技術を状況に応じて変化させて出上来がった技術”であるために、基本技術の土台を確立させなければそうそう出来るようになるものではない。そういつたことがいきなり出来るのは際立った才能のある者だけだろう。

ワタシは若者が明るい未来を切り開くのを楽しみにしている。だが、だからといって何でもかんでも教えてやるほど、ワタシはそんな親切ではない。山田先生にも言ったように、私はとても意地悪な男であるのだから。技術などは自らの努力や教師の教えを受ければ自ずと身についてくるのだ。ワタシが教えるのはそれにほんの少し変化を加えるような部分だけである。

彼女は迷いながら、苦しみながらも教師の務めを果たそうとしている。その姿のなんと尊く、また眩いことか。

願わくば……彼女がワタシや仮想に住む兔のように性根が捻じ曲がった人間にならないように。手遅れな人間からの言葉がその支えになることを願うばかりである。

そんなことを考えていると、また扉の開く音がした。さて、今度はどんな話が聞けるだろうか。

「いらっしやいませ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ②

新学期が始まってから数日。始めのうちはどこか気だるげな雰囲気蔓延していた食堂も、今は春の活気を取り戻しつつある。

そんな食堂の隅の隅、食堂カウンターからも返却口からも遠い不人気席近くに存在する壁の向こう側には、閑散としてるのが日常の喫茶店がある。



「師匠、少し相談があるのだが、いいだろうか？」

喫茶店のマスター——私が師匠と呼ぶその男性は、カップを拭きながら笑顔で返事をしてくれた。

「ええ、構いませんよ。ここはそういう場所ですから」

その言葉に甘えて、口を開く。といつても、あの戦闘は確か秘密裏に処理されるべき戦闘の筈だ。端から直接言えるわけもなく、当たり前障りのない所から話を始める。

「まあ、相談というよりは愚痴に近いのだが……。臨海学校で事件があった、という話を

聞いているか」

「ええ、一夏くんから聞いています。随分苦勞された、と」

「そうか。……あの時、私は指揮を執っていた」

「はい。——福音との戦い、お見事でした」

「な……!?!」

どうしてマスターがそれを——福音の事を知っている？

そんな疑問を口にする前に、彼は口を開いた。

「ラウラさん、家を造るのに必要なものは何でしょう？」

「は？」

唐突な、それも意図の読めない質問。困惑しながらも「大まかにで構いません」という言葉に従うことにする。

「……設計をする者と、建築材料。そしてそれらを設計通りに組み立てる者達、くらいだろうか」

「はい。それで構いません」

頷いた後、マスターは指を一本立てた。

「では急ですが一つ、イメージをしてみましょう……と、その前に前提を。貴女方はこれから先、よりチームで動く事が多くなると予想されます。なので、これからイメージし

てもらおうのは集団における戦闘となります。宜しいですか？」
 「分かった」

ことり。かちやり。

食器を並べる音をBGMにして、師匠は話を始める。

「ではまず始めに、大きな概念を作っておきましょう。今回の場合はそうですね……家の完成。これを戦闘における勝利と考えて下さい。そして建築の過程は戦闘の過程、設計士は指揮官を、大工は兵士を指し、建築材料は戦術の数ですね。途中で建材がなくなつた時、あるいは大工がいなくなつてしまった時に敗北としましょう」

「ふむ」

脳内で大凡のイメージをする。嫁の大工姿……ふむ、中々に似合っているな。……ではなくて！

慌てて首を振る私。師匠はそれに苦笑しつつも、再び真剣な顔を見せた。

「ここでまずハッキリと言っておきましょう。ラウラさん、一夏くんを含む貴女方のグループにおいて、設計士は貴女以外考えられません」

「私が……？しかし私はあの時」

負けたのだ、そう言おうとした口は続く言葉により塞がれた。

「何も勝負に勝つだけが戦闘の勝利ではないでしょう？ 先の戦闘の時、最悪のケースはどのようなものでしたか？」

先の戦闘における最悪のケース。それに対する答えは決まっている。

「私達が死ぬことだ。まだまだ技術が足りないにも関わらず軍用のモノと戦うのだから。死ぬ。これが考えられる最悪だった」

「成る程。では、貴女にとって戦闘における完璧な勝利とは、何でしょうか？」

「それは勿論敵を倒して、全員生き残る——！」

——ああ、そうか。

師匠は私の事など気にしないかのように話を続ける。

「勝利……つまり、家の完成において重要な要素に屋根があります。いくら土台が強固で骨組みが完璧であっても、屋根に隙間があれば雨漏りが起こりますし、夏は熱気、冬は冷気が入り込んで蓋の役目を成すことはないでしょう。これが所謂“詰めが甘い”という奴ですね」

「ならば、そうならないような屋根を作れば良い」

「ええ。そして、《それが設計士の仕事です》」

「……成る程な。指揮官、とはそういうことか」

「設計資格のない大工ばかりでは、何時迄も善い家は完成することがないように、戦士だ

けでは戦場で勝利を掴み取ることは基本的には不可能なのです。家には設計をし指示をする者、そして戦場には冷静に指揮を執る者が必要不可欠なのです。……そして、あの中でそれが出来るのは経験が豊富であるラウラさん、貴女しかいないでしょう」

戦士と指揮官、という例えに納得する。指揮官が落ちる事で混乱する兵士たちを、戦場の中で何度も見たことがある。それと同時に、屋根の例えも理解が出来た。

考え込む私を前に、師匠は話が変わりますが、と思い出したように言を發した。

「この前、クラリツサ・ハルフオーフさんにお会いしました」

「何ッ!？」

予想していない名を出され、思わず大声を出してしまった。

「なんでも、貴女の部下にあたる方であるとか」

「……ああ。彼女は私達の部隊で最も慕われている副隊長だ。私が周りを突き放していた時も、彼女はついてきてくれた。信頼できる、優秀な部下だよ」

今でこそ他の部下とも良好な関係を築けているが、昔の私は兎に角他人を拒絶していた。そんな中、ただひたすらついてきてくれた彼女。私の一番の部下だ。

「クラリツサさんと会話している中、彼女もまた、貴女の事を信頼している事が読み取れました。貴女の自慢話をしている時はそれはもう饒舌でしたよ。昼にお店に入った筈なのに、いつの間にか夜になっていましたか」

「……すまない。良く言っておく」

疲れたような苦笑を見せる師匠に対し、私は謝罪をするしかなかった。私の知らない所で何をやっているのだ、奴は。確かに師匠には何でも話してしまいたくなるような雰囲気があるが、だからと言って私の話をしなくても良いだろうに……。

そして、一つの仮説が思い浮かぶ。もしかしたら、師匠が私達のことをこんなに把握できているのは、私達と関わりが深い人間全員と話しているからではないのか？ ……いや、まさかな。いくら何でも人脈が広すぎる。という事は、やはり師匠の観察眼が優れているのか。

話を戻しましょう、そう言つて師匠は再びグラスを磨き始めた。

「シエブロン、という言葉をご存知でしょうか？」

「シエブロン？」

唐突な問い。話を戻す、と言つたからには恐らく意味があるのだろうが、その言葉は初耳だった。

「いや、知らないな」

「シエブロンは、紋章学における帯状で逆V字型の模様の一種です。さて、逆V字型と言えば？」

手で模様を作っている師匠を見ると、なるほど確かに屋根に見える。

だがそれに何の意味が——そう言おうとした刹那、さつきまでの話を思い出した。

「そうか、さつきの屋根の話は！」

「ご名答です、そう言つて師匠は笑う。」

「……さて、シエブロンの意味の1つには『信頼できる働きを成した建築家その他の者』というものがあるそうです。しっかりとした屋根を作る事はその働きの1つだと言えるでしょう。そして建築家が指揮官であるのならば」

「そうか、屋根は詰めだから、屋根の完成はつまり……！」

「はい——ということ、ワタシからこれをお贈りします」

答えようとした言葉は遮られ、手をお出しく下さい、と言われた。言葉に従うと、師匠はその掌の上に何かを置いた。

「これは……勲章？」

いい素材を使つていて、と一目で分かるくらいの輝きだ。幾つか勲章を授与された事はあるが、このような素材で大仰に作られたような物は授与されたことがない。そしてその紋様は。

「ええ。シエブロンの形をした勲章です。拙作ながら、作らせて頂きました」

「これだけのものを師匠が作ったのか!? ……いや、そんなことよりも私はこれを受け取る資格など」

「ありますよ」

ふわっと、頭の上に何かが乗る感覚がした。頭上には師匠の大きな手。どうやら撫でられているようだ。……ああ、暖かいな。

「もしかすると、先の事件は貴女にとっては詰めが甘かった、勝てなかった……そう考えているかもしれません。しかし、貴女たちは負けなかった。貴女達は軍用の機体を相手にして全員が生きて帰ってこられた。私にとって、これは間違いなく朗報でした。皆が帰ってくるのが、私にとつての勝利です。そしてそれは貴女の努力の結果でもありません——よく、頑張りましたね」

「……っ！」

屈託のない優しい笑顔に、胸が燃えているような錯覚を覚えた。同時に目頭が熱くなるのを必死に堪える。軍人たる者、泣いてはならない。過去に教えられた言葉を守るべく、平静を。これは教官から褒められるものとは違う、まるで包まれているかのような……。

——ああ。そうか。教官は“師匠”で、師匠はきつと“親”なのだ。教官は認める者、そして師匠は受け入れる者。

「貴女はとても優秀な方です。IS操縦の技量も高く、誰かに技術を教える事も出来る。

そして戦闘では戦闘を行いながら指揮を執る……今の一年生において、これだけの事を安定して行えるのはラウラさんくらいでしょう。だからこそ、迷うことなく、自分に自信を持つ事が大切なのです。しかし簡単にそのようなことが出来るはずはありません。人間というものは、とかく弱い生き物だからです」

瞬間の沈黙。

「……だからこそ、どうしても迷った時。その悩みの、自分の中に呼びかけてみるといいかもしれません。その時心の底から返ってきた答えは、きつと貴女を光へと導くでしょう。自分ほど自分を知らぬ者はいませんが、それと同時に自分ほど自分を知る者はいないので。自分との対話こそ、新たな気付きへの道なのです」

「自分との対話、か。私にとっては中々難しい問題だ。何せ私は」

造られた者であり、あのおぞましいモノと同一なのだから——。そう続けようとした言葉は、遮られた。

「生まれは関係ありませんよ、ラウラさん」

「え……？」

「貴女は今、自分の意志でここに在る。これは間違いなく真実です。出生がどうあれ、育ちがどうあれ、今の貴方は少なくともこの学園の一生徒、それ以上でもそれ以下でもありません。……それに、ここに来る方は、皆が何かしらの悩みを持っています。そして

それは今の貴方と同じです。皆が皆、自分との対話に苦しみながら生きています。そう、同じなのです。皆も、貴方も」

「……私は。私は悩んでいていいのか？迷っていても、いいのか？」

「ええ、勿論ですとも。我々は人間なのですから」

そう言った彼の柔らかい眼差しに、包まれるかのような感覚を覚えた。安心感に、頬が緩むのを止められない。

「……ああ。そうだな！」

——本当に。この人は、どこまでも私を知っている。心地よく耳に残る言葉で私を救ってくれる。

しかし、まだアレが聞けていない。

聞きたい。彼女が聞いた言葉を。彼女のような質問をすれば、聞けるだろうか。そう考えて聞いてみる。

「師匠。どうして貴方は、そんなに私達の事を知っているんだ？まるで思考を全て見透かしているかのようにだ」

『へ？ マスターについて知りたい？』

『ああ。弟子たる者、師匠の情報を集め越えようと努めるべきだと教わったからな』

『そ、そうなんだ。うーん、でも僕も全然あの人の事は分かんないよ？』

『？ 何故だ？』

『だってあの人ちよつと追求したら直ぐに——』

少しの間。彼はいつものように微笑んだ。

「マスターですから」

『——って言うんだもん』

そう言った時の目。仕草や一言。全てが私を惹きつける。ドイツにいた時には誰も見ることもなかったその暖かな眼差しが、私にはとても輝いて見えた。

「……フ、やはり師匠は流石だな！ その的確な判断力に洞察力、これなら教師や教官になっても多くの実績を残せそうだ」

いや、どちらかと言えば僧侶や牧師の方が向いているかもしれない。師匠の語りの一言一句に迷いは無く、まるで神のような強固な存在が後ろにいるかのような、揺るぎない自信がある。それはまさしく宗教家のような――

……などと考えている中、師匠は静かに首を横に振る。

「お褒め頂くのは光栄ですが、生憎ワタシはそのようなガラではありませんよ。ワタシが好きなのは教師のように生徒を直接導くのではなく、あくまで皆様のお膳立てをすることですので。そうですね……教職ではありませんが、『用務員』などはどうでしょうか」

その言葉に、目の前の男性が帽子と用務員服、それに清掃用具を持った姿を想像する。

絶望的に似合っていない。しかしそれを師匠に直接言うのは憚られる。

「ふっ、似合わないな。用務員と名乗るには、少々線が細すぎる」

「それは残念です」

そう言いながらも全く残念でもなさそうな顔をしていた。相変わらず掴めない人が、それもまたこの人の魅力の一つなのだろう。……さて、そろそろ時間だ。

「会計を」

「はい。有難うございました」

しかし、やられっぱなしというのも気に食わない。

「ああ……そうだ」

「はい？」

帰り際、師匠の方に目を向ける。

「ある者が言っていたのだが、何でもある国には師匠に位置するものを『父』と呼び慕うような文化があるらしいぞ？ ……ではな、父上」

「――」

初めて見る、目を丸めた師匠を横目に店を出た。少しは意趣返しになったのだろうか。……父上か、存外悪くない響きだ。

「……やってくれましたねえ。お陰で、私としたことが不覚をとってしまった。全く、クラリツサさんは今度は何を参考にしたのか」

*

